

「たちばな」について

1998.7.20

坂本 浩司



平安時代天徳三年十二月七日、宮中紫宸殿から見て庭の右手に橘（たちばな）が植えられ、左手の桜と対になった。その木を目印に名門の御曹司からなる近衛の兵が陣列を組むところから右近の橘、左近の桜と呼ばれることになるが、光源氏も、恋に目覚めたころはそこに並ぶ一人であった。橘は、万葉集に「非時（ときじく）の香（かく）の木の実」とあるように常世の国のものと考えられ、桜とともに特別な意味を持っていたようだ。いまの京都御所の橘は、安政年間に御所が建てかえられたときのもの、桜は昭和五年に植えられたものである。

朝日新聞社

左近の桜、後継樹に 開花も困難で68年ぶり2月に 京都御所 / 京都

97.12.26

平安時代から紫宸殿の前に植えられ、源氏物語の「花宴」冒頭にも描写された京都御所の「左近の桜」が八十年余りの樹齢や近年の夏の高温・小雨で衰え、来春の開花も困難な状況になったため、来年二月下旬に植え替えられることになった。宮内庁京都事務所が二十五日、発表した。左近の桜の植え替えは六十八年ぶり。

いまの桜は、一八五五年（安政二年）に「右近の橘（うこんのたちばな）」とともに紫宸殿前に植えられた桜の一部から苗木を育てたもので、親木が枯れた一九三〇年三月に後継樹となった。高さ約八メートルのヤマザクラで、毎年春に花を咲かせてきた。

朝日新聞社

万葉集巻六によると「橘は実さへ花さへその葉さへ枝に霜降りどいや常葉の樹」とあるが、これは聖武天皇が左大弁葛城王に姓、橘を賜った時のお歌であるという。校章はこのお歌の意の如く、永久不変の高潔なる節操と苦難にたえる 忍従の徳とを象徴するものである。

橘（たちばな）

ミカン科の常緑小高木。

紀伊半島以西の太平洋側に分布する日本原産の柑橘類ニホンタチバナは、高さ4メートルほどで、楕円形の葉は互生し、濃緑色で光沢があります。初夏に香の高い白色の五弁花が咲き、この花の美称がハナタチバナです。果実は冬に黄熟しますが、酸味が強く食べられません。

万葉集には76例みられ、「橘」「花橘」「山橘」「阿倍橘」「あから橘」「あかる橘」と詠まれています。

アベタチバナの「あべ」は「あえ」の転で、香の良い皮をあえ物に使ったことからついた名で、ミカンまたはクネンボのことといわれています。（ミカン…葉は濃緑色で光沢があり、花は白色五弁。果実は黄熟し、食用。クネンボ…九年母。インドシナ原産のミカン科の常緑小高木で、初夏に香の高い白色の花をつけ、果実は橙色で食用。） ヤマタチバナは、野生のタチバナまたはヤブコウジの古名。（ヤブコウジ…ヤブコウジ科の常緑小低木で、山林下に生え、高さ20センチメートルほど。葉は楕円形で、初夏に花冠の五裂する小白花が咲き、秋から冬にかけて赤く熟す丸い実がなる。）

通常の「橘」は夏の雑歌と夏の相聞歌に多く見られ、ホトトギスや菖蒲草との取り合わせで歌われることが多い植物です。その黄熟する実や白い花は玉として緒に通し、人に送ったり、カズラ（髪や冠の飾り）にして楽しみました。また、この木はめでたい木、常世の木とされ、庭にも植えられ親しまれました。

本文中の家持の歌は「山橘」が5例詠まれ、「あから橘」「あかる橘」も赤い実のことなので山橘の実のことと思われ、ヤブコウジを詠んだものは7例と考えられます。7例すべてがヤブコウジの赤い実を詠んだものです。小さなヤブコウジの木が赤い実を冬の寒さにも負けずにつけていることへの驚きや喜びがあったのでしょうか。

たちばな

- 1 生食されたミカンの古名。キシウミカンやコウジに類する。京都御所の紫宸殿（ししんでん）の南階下の西側にある「右近（うこん）の橘」はこれという。《季・新年》
*万葉 四一一「多知波奈（タチバナ）の成れるその実は」
- 2 ミカン科の常緑低木。日本で唯一の野生のミカンで近畿地方以西の山地に生え、観賞用に栽植される。高さ三～四メートル。枝は密生し小さなとげがある。葉は長さ三～六センチメートルの楕円状披針形で先はとがらず縁に鋸歯がある。葉柄の翼は狭い。初夏、枝先に白い五弁花を開く。果実は径二～三センチメートルの扁球形で一ヶ月下旬～一二月に黄熟するが、肉は苦く酸味が強いので生食できない。台湾では調味料に用いる。やまとたちばな。にほんたちばな。
- 3 「からたちばな（唐橘）」の異名。
- 4 はなたちばな（花橘）
- 5 紋所の名。橘の葉と実とを組み合わせて図案化したもの。橘姓（橘諸兄）の紋にはじまるといい、久世・井伊・黒田家と日蓮宗（日蓮の出自は井伊家の分家の貫名家という）の紋となる。橘、向い橘、杏葉（ぎょうよう）橘、枝橘など種々ある。
- 6 香の名。質は伽羅、あるいは真南蛮という。

- (1) 奈良県高市郡明日香村の地名。飛鳥川の上流。橘寺（菩提寺）がある。
- (2) 山口県南東部、大島（屋代島）にある地名。大島ミカンの栽培が盛ん。古い港町の安下庄は現在も漁港として栄えている。

しんとう（シンタウ）【橘神道】 1 京都梅宮の世襲祠官である橘氏に伝わったという神道。垂加神道に近いもの。 2 江戸中期に肥前国（長崎県）平戸の人橘三喜が主唱した神道の一派。神儒仏を折衷したもの。

づき【橘月】 陰暦五月の異称。

でら【橘寺】 奈良県高市郡明日香村橘にある天台宗の寺、菩提寺の俗称。山号は仏頭山。

聖徳太子誕生の地で太子創建の七寺の一つと伝えられる。古くは六十余の堂塔をそなえた大寺であったが、現在は元治元年再興の本堂（太子殿）・経堂・観音堂などを残す。

どり【橘鳥】 「ほととぎす（杜鵑）」の異名。

ひめ【橘媛】 おとたちばなひめ（弟橘媛）

おとたちばな ひめ【弟橘媛・弟橘比売】

おとたちばなひめ日本武尊（やまとたけるのみこと）の妃。忍山宿禰（おしやまのすくね）の娘。尊が東征して相模から上総へ渡る途中、海が荒れて進めなかったため、身代わりに海中に入って海神のたたりを解いたと伝える。橘媛。

もどき【橘擬】 パラ科の常緑低木。中国原産で、庭園や垣根に植栽される。高さ一～二メートル。根元からかたくてとげのある多くの細枝を斜めに出し、繁茂して丸い樹冠をつくる。葉は長さ約五センチメートル、線状楕円形、裏面は短毛を密布し灰白色を帯びる。初夏、枝の上部の葉腋から短い散房花序を出し、白または淡黄色の小さな五弁花を数個ないし十数個集める。果実は扁平な球形で橙黄色に熟す。ほそばのときわさんざし。ピラカンサ。

や【橘屋】 歌舞伎俳優一世市村羽左衛門。また、その一門の屋号。

やき【橘焼】 料理の名。魚の身をかまぼこにする時のようにすりつぶしてからびわの実の大きさに丸め、くちなしで黄色く色をつけ、たれ味噌で煮て、からたちの枝にさしたものの。

神農本草経では「橘柚」という名称で上品の八十七に記載されている。

『橘柚味辛温主胸中癥熱逆氣利水穀久服去臭下氣通神一名橘皮』

橘皮の陳久品を「陳橘皮」と称し、略して「陳皮」という。

本草綱目 橘

和名：きつ

学名：Citrus sinensis Osbeck.

科名：へんるうだ科（芸香科）

（ うん こう芸 香うんこう（カウ） 1 へんるうだの異名 2 じんちょうげ（沈丁花）の異名 ¹⁾）

集解

別録に曰く、橘、柚は江南（胡南省）及び山南（四川省東部から陝西省）の山谷に生ずる。十月に採取する。

恭曰く、柚の皮の厚く味甘きは橘皮の味の辛苦なるに及ばない。

その肉も橘のようで甘きと酸きとあり、酸きおば胡柑と名ける。

今俗に橙を柚といふは正しくない。按ずるに、郭璞は『柚は橙に似て実が酸く、橘よりも大きい』といひ、孔安國は『小なるを橘といひ、大なるを柚といふ。いずれも柑である』

頌曰く、橘、柚は今は江浙、荊襄、湖嶺、いずれもある。木は高さ十二丈、枳と見分けがつかぬようで、刺が茎間に出ている。夏初に白花を生じ、六七月に実がなり、冬に至って黄熟する。蕉説には、小なるを橘とし、大なるを柚とした。今醫家では、黄橘、青橘を用いて柚とはいはないが、青橘というのは柚の類ではあるまいか。

宗夾（ソウケツ）曰く、橘、柚は本来兩種のものだ。本草に『一名橘皮』とあり、後世のものがそれに誤って柚字を加えてから妄りに分別を生じたのである。且つ青橘、黄橘さへ治療上では違ふのだ。況んや柚の別種なるをやである。ただ郭璞の言ふところだけは眞に橘、柚を正確に知るものである。若し郭璞の言ふやうに分別せずして誤って柚皮を橘皮とするならば、それは無窮の患

¹⁾Kokugo Dai Jiten Dictionary. Shinsou-ban (Revised edition) © Shogakukan 1988.国語大辞典(新装版) ©小学館 1988.

を貽すものだ。

時珍曰く、橘、柚は、蘇恭の説が甚だ正しい。蘇頌は青橘とは橘のまだ黄にならぬものだという事実を知らずして柚としたので、誤である。そもそも橘、柚、柑の三者は相類しているが同物でない。橘の実はいくらか小さく、その瓣は味が微し酢く、その皮は薄くして紅く、味は辛くして苦い。柑は橘よりも大きく、その瓣は味が甘く、その皮はやや厚くして黄に、味は辛くして甘い。柚は大小はいづれも橙ほどで、その瓣は味が酢く、その皮は最も厚くして黄に、味は甘くして甚だしく辛くはない。かやうに区別すれば誤らぬのである。

事類合璧に『橘樹は高さ一丈ばかり、枝に多く刺が生え、その葉は両頭が尖り、緑色で表面が光り、太さ一寸餘、長さ二寸ばかりのもので、四月に小さい白花を著けて甚だ香しく、結実は冬に至って黄熟し、大なるものは盃ほどあり、包中に瓣があつて瓣中に核がある』とある。

王好古は青皮の項で、青皮は小さく未熟なもので、成熟して大きいものが橘である。色が赤いので紅皮といい、日久しきものを佳しとするので陳皮ともいう、と記している。

現在日本の市販品には陳皮、橘皮があり、中国ではその他黄橘皮、橘紅などがあるが、その基原植物は10数種もあり、はなはだ混乱している。柑橘の類は世界で最も早くから知られていた果樹で、その栽培化も古く、極めて多くの種類が記載されている。

宗の韓彦直の著した橘譜三卷には

橘の品種に十四種あるとある。

- 1, 黄橘 (扁小にして香霧が多い。乃ち橘としての上等品である。)
- 2, 朱橘 (小さくして色が火のように赤い)
- 3, 緑橘 (紺碧愛すべく、霜後を待たずして色、味が已に佳くなり、真冬に採っても新たなもののようになり、生いがある)
- 4, 乳橘 (形状が乳柑に似たもので皮が堅く、囊(じょう)が多く、味が甚だ酸芳)
- 5, 塙橘 (形状が大きくして扁く、外は緑で心が赤く、瓣が巨きくして液が多く、春を経ると甘美になる)
- 6, 包橘 (外が薄くして内が盈ち、その脈瓣は皮を隔てて数へられる)
- 7, 錦橘 (微小なもので、極めて軟美にして愛すべきものだが、多くは結ばない)
- 8, 沙橘 (細小で甘美)
- 9, 油橘 (皮が油で飾つたようなもので、中が堅く外が黒く、乃ち橘としては下等品)
- 10, 早黄橘 (秋の半ばに既に丹くなる)
- 11, 凍橘 (八月に花が開き、冬結実し、春採る)
- 12, 穿心橘 (実が大きくして皮が光り、心が虚していてとがっている穿てるものだ)
- 13, 荔枝橘 (横陽に産する。膚理が緻密で荔枝のようである)

橘實

気味 【甘く酸し、温にして毒なし】

弘景曰く、これを食へば痰を多くする。恐らく益あるものではない。原曰く、多食すれば膈に戀して痰を生じ肺氣を滞らす。瑞曰く、螃蟹(がいかい)と共に食えば人をして軟癰を患はしめる。

主治 【甘きものは肺を潤し、酸きものは痰を聚める】(臟器)

【消渴を止め、胃を開き、胸中の膈氣を除く】(大明)

発明 時珍曰く、橘皮は氣を下し痰を消し、その肉は痰を生じ飲を聚める

黄橘皮

釈名 紅皮(湯液) 陳皮(食療)

弘景曰く、橘皮は氣を療ずるに大いに勝れたもので東橘を好しとする。西江のものはそれに及ばない。陳久なるものに限るを良しとする。好古曰く、橘皮は色赤くして

日久しきものを佳しとする。故に紅皮、陳皮といふ。白を去ったものを橘紅といふ。

気味 【苦く辛らし、温にして毒なし】

主治 【胸中の癥熱、逆気。水、穀を利す。久しく服すれば、臭を去り、気を下し、神に通ずる】(本經)【気を下し、嘔咳を止め、胸中に気衝するもの、吐逆、霍乱を治し、脾の穀を消する能はぬを療じ、洩を止め、膀胱の留熱で停水し、淋を起すを除き、小便を利し、寸白蟲を去る】(別錄)【痰涎を清し、上気咳嗽を治し、胃を開き、氣痢に主効があり、癥瘕痞癖を破る】(甄權)【嘔噦、反胃、嘈雜して時に清水を吐するもの、痰痞、痰瘕、大腸悶塞、婦人の乳癰を療する。食料に入れば魚腥毒を解す】(時珍)

青橘皮

修治 時珍曰く、青橘皮とは橘のまだ黄にならずして青色なるもので、薄くして光り、その気が芳烈である。今世間では多く小柑、小柚、小橙で偽物を作るから慎重なる吟味が要だ。

気味 【苦く辛し、温にして毒なし】

主治 【氣滯。食を下し、積結、及び膈氣を破る】(頌)【堅癖を破り、滯氣を散じ、下焦の諸湿を去り、左脇、肝經の積氣を治す】(元素)【胸膈の氣逆、脇痛、小腹疝氣を治し、乳腫を消し、肝、膽を疏し、肺氣を瀉す】(時珍)

發明 元素曰く、青橘皮は氣味俱に厚く、沈にして降り、陰であって、厥陰、少陽の經に入り、肝、膽の病を治す。

杲曰く、青皮なるもの足の厥陰、引經の薬で、能く食を引いて太陰の倉に入り、滯を破り、堅を削り、いずれも下に在るの病を治す。滯氣があれば滯氣を破り、滯氣がなければ眞氣を損ずる。

好古曰く、陳皮は高きを治し、青皮は低きを治す。枳殻の胸膈を治し、枳實の心下を治すると同じ関係である。

震亨曰く、青皮なるものは肝、膽二經の氣分の薬である。故に一般に多く怒って滯氣があり、脇下に鬱積があり、或いは小腹に疝疼するにこれを用いて二經を疎通し、その氣を行らすのである。二經の實するものの場合には、先ず補して後にこれを用うべきものだ。又、肝氣を疏するには、青皮を加える。黒く炒れば血分へ入るといふ。

時珍曰く、青橘皮は、古代には用いなかったもので、宋時代の醫家に至って始めて用いたのである。その色は青く、氣は烈しく、味は苦くして辛い。これを修治するに醋を以てするは、所謂『肝は散(酸の誤り?)を欲す。急に辛を食って以て散じ、酸を以て泄し、苦を以て降す』である。陳皮は浮にして升起、脾、肺の氣分に入り、青皮は、沈にして降り、肝、膽の氣分に入る。一體二用であって物理の自然である。小兒の積を消するに、多く青皮を用いて最も能く汗を發するが、汗あるものには用いてはならぬ。

橘核

修治 時珍曰く、凡そ用いるに、新瓦で香ばしく焙じて殻を去り、仁を取って研碎して薬に入るべきである

気味 【苦し、平にして毒なし】

主治 【腎症腰痛、膀胱氣痛、腎冷、陰核腫痛】

発明 時珍曰く、橘核は足の厥陰に入り、青皮と同効である。故に腰痛、^{たいせん}瘰癧、下に在るの病を治す。

橘葉

気味 【苦し、平にして毒なし】

主治 【胸膈の逆気を導き、厥陰に入り、肝氣を行らし、腫を消し、毒を散ず。乳癰脇痛にこれを用い、経を行らす】

陳皮、橘皮は、我が国で多く産し、黄連と同様に中国、東南アジア方面に輸出している数少ない日本産漢薬の一つである。橘皮の基源は「大和本草」以来、シラワコウジ（白和柑子）をあてており、遠州白和（白輪）村に産したのでその名がある。小野蘭山は「本草あるいは医書に橘というものは皆こうじ類の総名なり」と言っている。しかし中国産の橘皮とは異なっており、中国から輸入される「黄橘皮」はオオベニミカン *C. tangarina* Hort. Ex Tanaka である。橘皮の陳久品を「陳皮」と称するが、現在一般に日本で市販される陳皮は、ウンシュウミカンの果皮で真の陳皮ではない。この商習慣は江戸時代からあったようで、小野蘭山も「和産の陳皮はみな柑皮にして真物にあらず」といっている。青皮は未熟の橘皮である。青皮の商品もはなはだ複雑で、柚、柑、橙、橘の未熟小果実を丸ごと又は横切りしたもの、（一般には枳殻という）や、その果実であり、日本や韓国ではウンシュウミカンの未熟又はやや黄熟した果皮を青皮と称している。

「為方絜矩」（平野重成）に収載されている「生成方選古方翼之下」呉茱萸湯類方の大橘皮湯の中に橘皮のことが書かれている。

大橘皮湯 「療傷寒嘔噦胸滿虚煩不安方」

橘皮一両、甘草一両、生姜一両、人參二兩

後世ニ言フ陳皮青皮ノ稱呼ノ泛濫ナルヲ香川太沖既ニ之ヲ謗リテ其陳皮トハ何物ノ陳皮ソ久年弊靴ノ如キモ之ヲ陳皮ト云ヘク水田中ノ蛙ノ背モ亦以テ青皮ト呼ブヘシトイヘル如ク此稱呼ハ實ニ宋元以後ノアヤマリニテアヤマリトヤ俗ナル誤稱ナリ且殊ニ此物ナトヲ煩クニ様ニ分テソレニ其効用ヲ論スヘキニハアラス畢竟ハ藥品中ニ鈍物ニテ絶テ之無ト云ドモ事ノ缺ルマテニ至ラヌ品ナリ且古ニ橘皮トイフハ必スタチハナノ皮ナリサレドモ今ノタチハナニハアラス今タチハナト呼モノハ八閩通志ノ猴橘ナリ橘に品類多シ

黄橘ハ「シロカウシ」一名「シラワカカウシ」ト云上品ニテ遠州白輪ヨリ出ス名産ナリ

朱橘ハ「アカカウシ」ト云一種九州ニ多シ形大ニメ柚ノ如シ今舶来ノミカン漬ハ皆コノ朱橘ナリ唐ミカント呼モノコレナリ薬用の青皮陳皮共に橘皮ナリ今世ニ今世ニ柑皮ヲ用ルハ非ナリ千金方ニ甘皮ト云ハ柑皮ナリ薬舗ニカウシノ青キ皮ノ乾タルヲ橘皮トイフト其辨詳ニ小野蘭山翁本草啓蒙ニ見エタルヲ猶査検スヘシ、然ルゴトキニハ世ニオシナヘテ柑ノミカンノ皮ヲ用ルハ非ナリサレドモ橘柑柚橙ノ類スヘテ効用モホ、相似タルモノニテ強チニ其主能ニモ格別ノ差別ヲ云ヘキホトノモノニアラス 中略 唯真ノ橘皮ヲ用ントナラハ啓蒙ニ言フ如ク遠州ノ黄橘九州及ヒテ八紀州ヨリ出ス処ノ朱橘ノ世ニ唐ミカント呼モノ、皮ヲ用ヒテ橘皮ト呼フヲ當レリトスヘシ 後略

「重校薬徴」吉益東洞著 尾台榕堂重校に

橘皮は、近世問々柑皮を以て橘子に代うるは非なり。撰び用うべし。真の橘樹は余は之を和州春日の祠前、遠州見附駅に觀たり。

「新古方薬囊」荒木性次

橘皮はみかんの果皮なり。みかんの実は皮の表面の色紅く中の食するところは黄色にして味甘く

酸く皮の味は辛にして微に苦を含む、之れ本草に記す橘皮の条件に合致す故にみかんの皮を橘皮にあてはめるなり。市場にて唐の橘皮と称する品はみかんの皮に似て甚だ薄手なり。色黄褐色芳香あり味微に辛く内に苦味あり。和産の蜜柑の皮は厚手にして色沢芳香俱に前者の似たり、之も亦微に辛味ありて内に苦を含む。本草綱目李時珍の説には橘皮は外面のキメが細かく色紅くして薄く皮の内面の白い筋が多く苦辛であるのが本物だと云って居る。故に本邦産にてもそれに近きものならば良いと云ふことになるべし。

次の表は漢薬の臨床応用におけるミカン科の生薬を抜粋した表であります。

ちなみに橘皮はなく陳皮、青皮は収載されていました。

名称	分類	科名	味	性	帰経
黄柏	清熱燥湿薬	ミカン	苦	寒	腎 膀胱 大腸
白鮮皮	清熱解毒薬	ミカン	苦	寒	脾胃 膀胱 小腸
呉茱萸	温裏去寒薬	ミカン	辛苦	大熱小毒	肝胃脾腎
蜀椒	温裏去寒薬	ミカン	辛	大熱有毒	脾胃肺腎
陳皮	理気薬	ミカン	辛苦	温	肺脾
青皮	理気薬	ミカン	苦辛	温	肝胆
枳実	理気薬	ミカン	苦酸	微寒	脾胃
仏手柑	理気薬	ミカン	辛苦酸	温	肺脾
両面針	理気薬	ミカン	辛	平、小毒	
降香	理血薬(止血薬)	ミカン	辛	温	肝
黄皮核	訳者補遺	ミカン	辛苦	温	
黄皮根	訳者補遺	ミカン	辛微苦	温	
九里香	訳者補遺	ミカン	辛	温	
檸檬根	訳者補遺	ミカン			
東風桔	訳者補遺	ミカン	辛	温	

下の表は、経験・漢方処方分量集（大塚・矢数）では、橘皮が配合されている処方の内、保険適用になっているエキス剤剤の内容の比較をしたものである。

生薬エキスメーカーの生薬比較

処方集では橘皮の処方名	ツムラ	コタロー	KTS 建林	マツウラ
九味檳榔湯（浅田家）		橘皮		
釣藤散（本事方）	陳皮		橘皮	陳皮
茯苓飲（金）	陳皮	陳皮		
茯苓飲合半夏厚朴湯	陳皮			

下の表は、経験・漢方処方分量集（大塚・矢数）では、枳殻が配合されている処方の内、保険適用になっているエキス剤剤の内容の比較をしたものである。

処方集では枳殻の処方名	ツムラ	コト-	太虎堂	大杉	KTS	テイワ
荊芥連翹湯（一貫堂）	枳實		枳實	枳實	枳殻	枳實
五積散（局方）	枳實	枳殻			枳殻	枳實
潤腸湯（回春）	枳實		枳實			
参蘇飲（局方）	枳實		枳實			
清上防風湯（回春）	枳實			枳實		
通導散（回春）	枳實	枳實	枳實			

エキスメーカーの橘皮・陳皮・枳實・枳殻

ツムラ 陳皮は C Unshiu ウンシュウミカン

産地、愛媛ほか

枳實は C natudaidai ナツミカン

産地、高知、徳島

コタロー	枳實、枳殻は中国浙江省のダイダイ、陳皮は中国温州みかん、橘皮は、中国産のタチバナ
建林（KTS）	橘皮は、中国広東省のタチバナ
マツウラ	陳皮は、中国浙江省、C unshiu marcov
大杉	枳實は、中国産のダイダイ、ナツミカン
太虎堂	枳實は 日本四国産のなつみかん（一部ダイダイ）
テイコク	

現在の柑橘系の商品体系

生薬名	産地	
陳皮	日本(四国)、中国(浙江省)	ウンシュウミカン
橘皮	中国(浙江省)	ウンシュウミカン
青皮	中国(江西省)	ウンシュウミカンの幼果皮
枳實	中国(浙江省)	ダイダイ（3 cm 以下の未成熟果実）
枳殻	中国(浙江省)	ダイダイ（4 cm 以上の成熟直前の果実）

中国産の橘皮・陳皮・青皮は Citrus reticulata であることは間違いなし。ただしこの種に 40 種あり、この中にウンシュウミカンがあり、栃本天海堂で販売中の中国産のものがある。ウンシュウミカンは明治時代、日本で突然変異したのが発見されたもので、近年、種なし、甘みが強いことから中国に苗が入り栽培されている。栃本の橘皮・陳皮・青皮はこのウンシュウミカンの可能性が高い。

橘皮、陳皮、青皮、枳實、枳殻で 2 種以上配合されている処方

	橘皮	陳皮	青皮	枳實	枳殻
橘皮枳實生薑湯（金）					
茯苓飲（金）					
茯苓飲合半夏厚朴湯					
烏藥順氣散（局方）					
溫膽湯（千金）					
加減瀉白散（東垣）					
葛花解腥湯（弁惑論）					
括蓼枳實湯（回春）					
枳縮二陳湯（回春）					
行氣香蘇散（医鑑）					
高沈無憂散（回春）					
五積散（局方）					
柴胡疎肝湯（一貫堂）					
實脾湯（回春）					
順氣和中湯（古今医鑑）					
消痞湯（濟生）					
參蘇飲（局方）					
腎炎一方（新中国経験）					
清熱解鬱湯（回春）					
大七氣湯（濟生方）					
竹茹溫膽湯（寿世保元）					
通導散（回春）					
當歸養血湯（回春）					
分消湯（回春）					
分心氣飲（局方）					
妙功十一丸（儒門）					

抑肝扶脾散（古今医鑑）					
柴胡疎肝湯（統旨）					
清上飲（寿世保元）					

橘皮（C reticulate Blanco）と青皮（C reticulate Blanco）に配合について（処方理解のための配合応用から）

橘皮は気を十分に流通させ、胃を整えて痰を除く働きに優れ、青皮は気の鬱結を疏散し、積滯を消徐する働きに優れる。この二葉を配合すれば、肝気の滞りを散じて胃の働きを増進し、気を宣通し散結して痛みを止める効能をあらわす。

肝気の鬱滯や胃気不和による両脇部の腫痛、胸腹部の満悶などの症状に常用する。

【橘皮】

傷寒論から「橘」を検索

〔二六〇〕傷寒七、八日，身黄如橘子色，小便不利，腹微滿者，茵陳蒿主之。

金匱要略から「橘」を抜粋

〔一一八〕胸痺，胸中氣塞、短氣，茯苓杏仁甘草湯主之；橘枳薑湯亦主之。

『千金』、『外臺』無「橘枳薑湯亦主之」七字。

茯苓杏仁甘草湯方

茯苓（三味） 杏仁（五十個） 甘草（一兩）

右三味，以水一斗，煮取五升，溫服一升，日三服，不差更服。

橘枳薑湯方

橘皮（一斤） 枳實（三兩） 生薑（半斤）

右三味，以水五升，煮取二升，分溫再服。『肘後』、『千金』云治胸痺，胸中怫鬱如滿，噎塞習習如癢，喉中澀燥唾沫。

〔一三九〕寒疝，腹中痛及脅痛裏急者，當歸生薑羊肉湯主之。

當歸生薑羊肉湯方

當歸（三兩） 生薑（五兩） 羊肉（一斤）

右三味，以水八升，煮取三升，溫服七合，日三服。若寒多者，加生薑成一斤；痛多而嘔者，加橘皮二兩，白朮一兩；加生薑者，亦加水五升，煮取三升二合，服之。

【附方】

『外臺』茯苓飲：治心胸中有停痰宿水，自吐出水後，心胸間虛，氣滿不能食。

消痰氣，令能食（「自吐出水」，『外臺』作「自水吐出」）。

茯苓 人參 白朮（各三兩） 枳實（二兩） 橘皮（二兩半） 生薑（四兩）

右六味，水六升，煮取一升八合，分溫三服，如人行八九里進之

〔三一三〕乾嘔，噦，若手足厥者，橘皮湯主之。

橘皮湯方

橘皮（四兩） 生薑（半斤）

右二味，以水七升，煮取三升，溫服一升，下咽即愈。

〔三一四〕噦逆者，橘皮竹茹湯主之。

橘皮竹茹湯方

橘皮（二升） 竹茹（二升） 大棗（三十枚） 生薑（半斤） 甘草（五兩） 人參（一兩）

右六味，以水一斗，煮取三升，溫服一升，日三服。

大塚・矢数の処方分量集から「橘皮」を含む処方を抜粋

郁李仁湯（本朝経験）

茯苓 杏仁 橘皮 防己 蘇子各 3.0 郁李仁 4.0 或いは桑白皮 檳榔 2.0 を加える

烏苓通氣湯（回春）

當歸 茯苓 朮各 3.0 烏藥 山查子 香附子 延胡索各 2.5 芍藥 橘皮 檳榔各 2.0
 澤瀉 1.5 乾生薑 木香 甘草各 1.0
 加味平胃散（医方考）
 蒼朮 4.0 厚朴 橘皮 3.0 乾生薑 甘草各 1.0 大棗 神麴 麦芽各 2.0
 華蓋散（同方）
 麻黃 杏仁各 4.0 茯苓 5.0 橘皮 桑白皮 蘇子各 2.0 甘草 1.0
 夏橘湯（木村家）
 半夏 朮各 2.0 檳榔 橘皮 木瓜各 1.2
 橘皮湯（金）
 橘皮 3.0 生薑 6.0（乾 1.5）
 橘皮枳實生薑湯（金）
 橘皮 3.0 枳實 2.0 生薑 6.0（乾 1.5）
 橘皮大黃朴硝湯（金）
 橘皮 大黃各 2.0 芒硝 3.0
 橘皮竹茹湯（金）
 橘皮 4.0 竹茹 2.0 大棗 生薑各 6.0 甘草 3.0 人參 1.5
 橘皮半夏湯（医通）
 柴胡 橘皮 杏仁 桔梗各 3.0 半夏 茯苓 香附子各 4.0 桑白皮 蘇子
 乾生薑各 1.0
 玉穗湯（養寿院方）
 荊芥 橘皮 山查子各 3.0
 九味半夏湯（飲病論）
 半夏 橘皮 甘草 柴胡 猪苓各 3.0 澤瀉 茯苓各 4.0 乾生薑 升麻 1.0
 九味檳榔湯（浅田家）
 檳榔 4.0 厚朴 桂枝 橘皮 生薑（乾 1.0）各 3.0 大黃 木香 甘草各 1.0 蘇葉 1.5
 鷄鳴散（時方歌括）
 檳榔 4.0 木瓜 生薑（乾 1.0）各 3.0 橘皮 桔梗各 2.5 蘇葉 吳茱萸各 1.0
 鷄鳴散加茯苓（時方歌括）
 檳榔 木瓜各 3.0 橘皮 桔梗各 2.5 吳茱萸 蘇葉各 1.0 生薑（乾 1.0）2.0 茯苓 6.0
 虎翼飲（産論）
 半夏 8.0 生薑 茯苓各 4.0 橘皮 3.0 伏竜肝 15.0
 柴胡養榮湯（温疫論）
 柴胡 5.0 黃芩 當歸 芍藥 括藎根各 2.5 地黃 3.0 知母 大棗各 2.0 橘皮 甘草
 各 1.5 生薑 1.0
 除湿補氣湯（濟生）
 橘皮 柴胡 知母各 3.0 黃耆 黃柏各 1.5 蒼朮 當歸各 5.0 五味子 甘草 藁本
 升麻各 1.0
 治小兒愛吃泥方（寿世保元）
 黃芩 橘皮 白朮 茯苓 使君子 甘草各 2.0 胡黃連 1.0 石膏 5.0
 釣藤散（本事方）
 釣藤 橘皮 半夏 麥門冬 茯苓各 3.0 人參 菊花 防風各 2.0 石膏 5.0 甘草
 乾生薑各 1.0
 中正湯（南陽）
 半夏 4.0 朮 3.0 藿香 橘皮 乾薑 厚朴 大黃各 2.0 黃連 1.5 木香 甘草 0.6
 唐侍中一方（外臺秘要）
 檳榔 4.0 生薑（乾 1.0） 橘皮 木瓜各 3.0 吳茱萸 蘇葉各 2.0
 貝母湯（本事方）
 柴胡 3.0 貝母 桂枝 杏仁各 2.0 五味子 桑白皮 橘皮 黃芩各 2.5 乾薑 0.5
 甘草 生薑 木香各 1.0

茯苓飲（金）

茯苓 5.0 朮 4.0 人參 生薑（乾 1.0）橘皮各 3.0 枳實 1.5

茯苓飲合半夏厚朴湯

茯苓 5.0 朮 生薑（乾 1.0）4.0 人參 橘皮 厚朴各 3.0 枳實 1.5 半夏 6.0 蘇葉 2.0

弄玉湯（南陽）

朮 茯苓各 5.0 桂枝 3.0 橘皮 2.0 甘草 1.5 黃連 1.0 木香 0.6

【陳皮】

傷寒論中に「陳皮」なし

金匱要略から「陳皮」を検索

雜療方第二十三

退五臟虛熱，四時加減柴胡飲子方

冬三月加：柴胡（八分） 白朮（八分） 陳皮（五分） 大腹檳榔（四枚，并皮子用） 生薑（五分） 桔梗（七分）

春三月加：枳實 減：白朮 共六味

夏三月加：生薑（三分） 枳實（五分） 甘草（三分） 共八味

秋三月加：陳皮（三分） 共六味

右各吹咀，分爲三貼，一貼以水三升，煮取二升，分溫三服。如

人行四、五里進一服，如四體壅，添甘草少許，每貼分作三小貼，每小貼以水一升，煮取七合溫服，再合滓爲一服，重煮都成四服。疑非仲景方。

長服訶黎勒丸方疑非仲景方

訶黎勒（煨） 陳皮 厚朴（各三兩）

右三味，末之，煉蜜丸如梧子大，酒飲服二十丸，加至三十丸。

大塚・矢数処方分量集より「陳皮」を検索

医王湯（補中益氣湯）

黃耆 人參 朮各 4.0 當歸 3.0 陳皮 大棗各 2.0 甘草 1.5 乾生薑 升麻各 0.5

異功散（局方）（四君子湯に陳皮を加えたもの）

人參 白朮 茯苓 陳皮各 4.0 乾生薑 0.5 大棗 甘草各 1.0

胃苓湯（回春）

蒼朮 厚朴 陳皮 猪苓 澤瀉 白朮 芍藥 茯苓各 2.5 桂枝 2.0 大棗 乾薑 甘草各 1.0

烏藥順氣散（局方）

烏藥 陳皮 殭蚕 麻黃 川芎 桔梗各 2.5 枳殼 2.0 白芷 甘草各 1.5 乾生薑 1.0

溫膽湯（千金）

半夏 茯苓各 6.0 陳皮 2.5 竹茹 2.0 枳實 甘草 乾生薑各 1.0

益氣養榮湯（外科樞要）

黃耆 白朮 茯苓 人參 當歸 川芎 芍藥 熟地黄 陳皮 貝母 香附子各 2.0

柴胡 1.5 桔梗 甘草各 1.0

黃耆湯（直指）

黃耆 人參 蝦蟇 使君子各 1.5 鼈甲 陳皮 川芎 芍藥 生薑（乾 1.0）各 2.0

柴胡 2.5 當歸 地黄 茯苓 半夏各 3.0

黃連消毒飲（壽世保元）

黃連 羌活 黃芩 藁本 防己 桔梗 當歸 地黄 知母 獨活 防風 黃耆 連翹各 1.5 人參 甘草 陳皮 蘇木 澤瀉各 1.0

加減胃苓湯（回春）

猪苓 陳皮 茯苓 澤瀉 白朮 蒼朮各 2.5 甘草 神麴 厚朴 木瓜 檳榔 大腹皮

香附子 山查子 縮砂各 1.5 乾生薑 燈心草各 1.0

加減瀉白散（東垣）

桑白皮 3.0 地骨皮 知母 陳皮 桔梗各 1.0 青皮 細辛 黃芩 甘草各 2.0
 加減小柴胡湯（回春）
 柴胡 黃芩 梔子 柿蒂 縮砂 半夏 陳皮各 2.0 藿香 茴香 沈香 木香 乾生薑
 甘草各 1.0 烏梅 竹茹各 1.5
 加味八仙湯（回春）
 當歸 川芎 熟地黄 半夏各 2.5 茯苓 芍藥 陳皮各 3.0 人參 牛膝 秦艽各 2.0
 防風 羌活各 1.5 白朮 4.0 柴胡 桂枝 甘草各 1.0
 化食養脾湯（証治大還）（六君子湯方内に縮砂、神麴、麦芽、山楂子）
 人參 白朮 茯苓 半夏各 4.0 陳皮 大棗 神麴 麦芽 山楂子各 2.0 縮砂 1.5
 乾生薑 甘草 1.0
 藿香正氣散（局方）
 白朮 半夏 茯苓各 3.0 厚朴 陳皮 大棗各 2.0 桔梗 1.5 大腹皮 藿香 白芷
 甘草 乾生薑 蘇葉各 1.0
 葛花解腥湯（弁惑論）
 白豆蔻 縮砂 葛花各 6.0 木香 1.5 青皮 1.0 茯苓 陳皮 猪苓 人參各 2.0 朮
 神麴 澤瀉各 3.0 乾薑 1.0
 括蕁枳實湯（回春）
 當歸 茯苓 貝母各 3.0 括蕁仁 桔梗 陳皮 黃芩各 2.0 乾生薑 砂仁 木香
 甘草 梔子 枳實 竹茹各 1.0
 枳縮二陳湯（回春）
 枳實 縮砂各 1.5 半夏 茯苓各 3.0 陳皮 香附子 厚朴 延胡索各 2.0 茴香 木香
 草蔻 乾生薑 甘草各 1.0
 芎歸調血飲（回春）
 當歸 川芎 熟地黄 朮 茯苓 陳皮 烏藥 香附子 牡丹皮各 2.0 益母草 大棗
 各 1.5 乾薑 甘草各 1.0
 芎芷香蘇散（濟生）
 川芎 白芷 香附子 陳皮 葱白 羌活各 2.0 乾生薑 薄荷 蘇葉 甘草各 1.0
 杏蘇散（直指方）
 蘇葉 3.0 五味子 大腹皮 烏梅 杏仁各 2.0 陳皮 桔梗 麻黃 桑白皮 阿膠 紫苑
 各 1.5 甘草 1.0
 啓脾湯（回春）
 人參 連肉 山藥各 3.0 朮 茯苓各 4.0 山楂子 陳皮 澤瀉各 2.0 甘草 1.0
 香砂平胃散（回春）
 蒼朮 香附子各 4.0 厚朴 陳皮各 3.0 大棗 2.0 乾生薑 甘草 藿香各 1.0 縮砂 1.5
 香砂養胃湯（回春）
 朮 茯苓各 3.0 蒼朮 厚朴 陳皮 香附子 白豆蔻 人參各 2.0 木香 縮砂 甘草
 大棗各 1.5 乾生薑 0.7
 香砂六君子湯（内科摘要）
 人參 朮 茯苓 半夏各 3.0 陳皮 香附子各 2.0 大棗 1.5 乾生薑 甘草 縮砂
 藿香各 1.0
 香蘇散（局方）
 香附子 4.0 蘇葉 甘草各 1.0 陳皮 2.5 生薑（乾 1.0）3.0
 行氣香蘇散（医鑑）
 香附子 蘇葉 陳皮 烏藥 羌活 川芎各 2.5 麻黃 枳殼各 2.0 乾生薑 甘草各 1.0
 行濕補氣養血湯（回春）
 人參 朮 茯苓各 2.5 當歸 芍藥 川芎各 2.0 木通 厚朴 陳皮 大腹皮 羅蔔子
 海金沙各 1.5 木香 甘草 蘇葉各 1.0
 高沈無憂散（回春）
 陳皮 半夏 茯苓 枳實 竹茹 麥門冬 龍眼肉 石膏各 4.0 人參 1.5 甘草 2.5

絳礬丸（方輿輓）

綠礬 10.0 厚朴 陳皮 三稜 莪朮 黃連 苦參 朮各 5.0 甘草 2.0 水莎 15.0

五積散（局方）

蒼朮 陳皮 茯苓 朮 半夏 當歸各 2.0 厚朴 芍藥 川芎 白芷 枳殼 桔梗
乾薑 桂枝 麻黃 甘草 大棗各 1.0

柴胡厚朴湯（外臺）

柴胡 茯苓各 5.0 厚朴 陳皮 生薑 檳榔各 3.0 蘇葉 1.5

柴胡疎肝湯（一貫堂）

當歸 芍藥 川芎 地黃 桃仁 牡丹 柴胡 桂枝 陳皮各 3.0 枳殼 紅花 甘草
大黃 芒硝各 1.5

柴芍六君子湯

人參 白朮 茯苓 半夏各 4.0 柴胡 芍藥各 3.0 陳皮 大棗各 2.0 乾生薑 甘草
各 1.0

三和散（局方）

沈香 蘇葉 大腹皮各 2.0 木香 陳皮 檳榔 木瓜各 1.5 白朮 川芎各 3.0 乾生薑
甘草各 1.0

滋陰降火湯（回春）

當歸 芍藥 地黃 天門冬 麥門冬 陳皮各 2.5 朮 3.0 知母 黃柏 甘草 1.5

滋陰至寶湯（回春）

當歸 芍藥 白朮 茯苓 陳皮 知母 香附子 地骨皮 麥門冬各 3.0 貝母 薄荷
柴胡 甘草各 1.5

紫蘇子湯（千金）

半夏 4.0 蘇子 當歸 桂枝 厚朴 柴胡 陳皮各 3.0 杏仁 桑白皮各 2.5 甘草 1.5

實脾湯（回春）

蒼朮 茯苓 朮各 2.5 陳皮 厚朴 香附子 猪苓 澤瀉各 2.0 枳殼 大腹皮 縮砂
木香 乾生薑 燈心草各 1.0

十味香需飲（百一）

黃耆 人參 陳皮 木瓜 厚朴 扁豆各 2.0 朮 3.0 茯苓 4.0 香需 2.5 甘草 1.5

十神湯（局方）

川芎 甘草 麻黃 紫蘇葉 白芷 升麻 陳皮 香附子 芍藥 大棗 葱白各 2.0
葛根 6.0

順氣和中湯（古今醫鑑）

陳皮 香附子 梔子各 2.5 茯苓 半夏 白朮各 3.0 黃連 枳實 神麴各 2.0 縮砂
甘草 乾生薑各 1.0

春林赤石脂湯（華岡）

黃耆 人參 朮各 4.0 當歸 赤石脂各 3.0 陳皮 生薑（乾 1.0） 柴胡 大棗各 2.0
甘草 1.5 升麻 0.5

正氣天香湯（入門）

香附子 4.0 陳皮 烏藥各 3.0 蘇葉 乾薑 甘草各 1.0

消痞湯（濟生）

白朮 茯苓 陳皮 半夏各 3.0 澤瀉 人參各 2.5 枳實 厚朴 縮砂各 1.5 黃連
乾生薑各 0.8

升陽散火湯（傷寒六書）

麥門冬 柴胡各 4.0 人參 當歸 芍藥 朮 陳皮 茯苓各 3.0 黃芩 2.0 甘草 乾薑
各 1.0

舒筋立安湯（回春）

防風 獨活 茯苓 羌活 川芎 白芷 地黃 蒼朮 紅花 桃仁 天南星 陳皮 半夏
朮 威靈仙 牛膝 木瓜 防己 黃芩 連翹 木通 龍胆 甘草 竹瀝各 1.2 附子
0.5~1.0

神効内托散（正宗）

當歸 朮 茯苓各 3.0 黄耆 人參 芍藥 川芎 陳皮各 2.0 木香 甘草 穿山甲
乾薑 大棗 附子各 1.0

神秘湯（外臺）

麻黄 5.0 杏仁 4.0 厚朴 3.0 陳皮 2.5 甘草 柴胡各 2.0 蘇葉 2.0

藜朮防風湯（蘭室秘藏）

藜朮 防風 澤瀉 陳皮 柴胡各 2.0 當歸 朮 桃仁各 3.0 甘草 黄柏 大黃
升麻 紅花各 1.0

參蘇飲（局方）

蘇葉 枳殼 乾生薑 木香 甘草各 1.0 桔梗 陳皮 葛根 前胡各 2.0 半夏 茯苓
各 3.0 人參 大棗各 1.5

腎炎一方（新中国經驗方）

茯苓 6.0 澤瀉 猪苓各 4.0 半夏 芍藥各 3.0 厚朴 2.5 陳皮 2.0 枳殼 甘草
各 0.5

清湿化痰湯（寿世保元）

天南星 黄芩 生薑（乾 1.0）各 3.0 半夏 茯苓 蒼朮各 4.0 陳皮 2.5 羌活 白芷
白芥子 甘草各 1.5

清暑益氣湯（近製）

人參 白朮 麥門冬各 3.5 五味子 陳皮 甘草 黄柏各 2.0 當歸 黄耆各 3.0

清燥養榮湯（温疫論）

知母 括蕒根 當歸 芍藥各 2.0 地黄 4.0 陳皮 燈心草 甘草各 1.5

清熱解鬱湯（回春）

山梔子 蒼朮各 3.0 川芎 香附子 陳皮各 2.0 黄連 甘草 枳殼各 1.0 乾薑 生薑
各 0.5

清肺湯（回春）

黄芩 桔梗 陳皮 桑白皮 貝母 杏仁 山梔子 天門冬 大棗 竹茹各 2.0 茯苓
當歸 麥門冬各 3.0 五味子 乾薑 甘草各 1.0

喘四君子湯（回春）

人參 厚朴 蘇子 陳皮各 2.0 茯苓 當歸 朮各 4.0 縮砂 木香 沉香 甘草各 1.0
桑白皮 1.5

壯原湯（赤水玄珠）

人參 白朮 茯苓各 4.0 破胡紙 桂枝各 3.0 縮砂 陳皮各 2.0 乾薑 附子各 1.0

疎經活血湯（回春）

當歸 地黄 蒼朮 川芎 桃仁 茯苓各 2.0 芍藥 2.5 牛膝 威靈仙 防己 羌活
防風 龍胆 陳皮各 1.5 生薑（乾 1.0） 白芷 甘草各 1.0

蘇子降氣湯（局方）

蘇子 3.0 半夏 4.0 陳皮 厚朴 前胡 桂枝 當歸各 2.5 大棗 甘草各 1.5
乾薑 0.5

大七氣湯（濟生方）

三棱 莪朮 青皮 陳皮 桔梗 藿香 香附子 益智 桂枝各 4.0 甘草 1.0

托裏消毒飲（回春）

防風 當歸 川芎 白芷 桔梗 厚朴 皂角 穿山甲各 1.5 括蕒根 陳皮各 2.0
黄耆 金銀花各 2.5 正宗の托裏消毒飲は防風 括蕒根 穿山甲 厚朴 を去り
人參 白朮 茯苓を加える。

竹茹温膽湯（寿世保元）

柴胡 竹茹 茯苓 麥門冬各 3.0 半夏 5.0 香附子 桔梗 陳皮 枳實各 2.0
黄連 甘草 人參 乾薑各 1.0

丁香柿蒂湯（寿世保元）

丁香 良姜 木香 沉香 茴香 藿香 厚朴 縮砂 甘草 乳香各 1.0 柿蒂 桂枝

半夏 陳皮各 3.0
 丁香茯苓湯（楊氏）
 丁香 附子各 1.0 茯苓 半夏各 6.0 陳皮 2.0 桂枝 3.0 乾薑 縮砂各 1.5
 通導散（回春）
 大黃 枳殼 當歸各 3.0 芒硝 4.0 厚朴 陳皮 木通 紅花 蘇木 甘草各 2.0
 提肛散（外科正宗）
 川芎 當歸 白朮 人參 黃耆 陳皮 甘草各 4.0 柴胡 黃芩各 2.0 升麻 黃連
 白芷各 1.0 赤石脂 10.0
 當歸養血湯（回春）
 芍藥 熟地黄 茯苓 當歸各 3.0 貝母 括蕪實 枳實 陳皮 厚朴 香附子 川芎
 蘇子各 1.5 沉香 黃連各 1.0
 導水茯苓湯（奇効良方）
 茯苓 澤瀉 白朮各 3.0 麥門冬 5.0 桑白皮 蘇葉 大腹皮 縮砂 木香 燈心草各 1.0
 檳榔 木瓜各 2.0 陳皮 1.5
 導滯通經湯（拔萃）
 木香 1.0 朮 澤瀉各 5.0 桑白皮 1.5 陳皮 3.0 茯苓 6.0
 二朮湯（回春）
 白朮 天南星 陳皮 茯苓 香附子 威靈仙 蒼朮 羌活 甘草各 1.5 半夏 2.0
 生薑（乾 0.6）3.0
 二陳湯（局方）
 半夏 茯苓各 5.0 陳皮 4.0 甘草 乾薑各 1.0
 人參養胃湯（局方）
 蒼朮 半夏 茯苓各 4.0 厚朴 陳皮各 2.0 藿香 草菓 人參 烏梅各 1.5 甘草
 乾薑 大棗各 1.0
 人參養榮湯（局方）
 地黄 當歸 朮 茯苓各 4.0 桂枝 2.5 芍藥 遠志 陳皮 黃耆各 2.0 人參 3.0
 甘草 五味子各 1.0
 八味帶下方（名家方選）
 當歸 5.0 川芎 茯苓 木通各 3.0 陳皮 2.0 山梔 4.0 金銀花 大黃各 1.0
 半夏白朮天麻湯（試効）
 半夏 白朮 陳皮 茯苓 蒼朮各 3.0 麦芽 天麻 神麴各 2.0 黃耆 人參 澤瀉各 1.5
 黃柏 1.0 生薑 乾薑 0.5
 不換金正氣散（局方）
 蒼朮 4.0 厚朴 陳皮各 3.0 半夏 6.0 大棗 乾生薑各 1.0 藿香 甘草各 1.5
 茯苓補心湯（万病回春）
 茯苓 生地黄（又は乾地黄）麥門冬 酸棗仁各 4.0 人參 白朮 當歸 芍藥 陳皮
 黃連各 3.0 甘草 1.0 烏梅 2.0
 分消湯（回春）
 蒼朮 茯苓 朮各 1.5 陳皮 厚朴 香附子 猪苓 澤瀉各 2.0 枳實 大腹皮 縮砂
 木香 乾薑 燈心草各 1.0
 分心氣飲（局方）
 桂枝 芍藥 木通 半夏 甘草 大棗 生薑（乾 1.0）燈心草各 1.5 桑白皮 青皮
 陳皮 大腹皮 羌活 茯苓 蘇葉各 2.0
 平胃散（局方）
 蒼朮 4.0 厚朴 陳皮各 3.0 大棗 2.0 乾薑 甘草各 1.0
 補陰湯（回春）
 人參 芍藥 乾地黄 陳皮 牛膝 破胡紙 杜仲各 2.0 當歸 茯苓各 3.0 茴香 知母
 黃柏 甘草各 1.0
 補中益氣湯（弁惑論）

黄耆 人參 朮各 4.0 當歸 3.0 陳皮 大棗各 2.0 甘草 1.5 柴胡 1.0 乾薑 升麻各 0.5

補中治濕湯（濟生）

白朮 茯苓 陳皮 蒼朮各 3.0 人參 黄芩 厚朴 澤瀉 木通 麥門冬各 2.0 升麻 0.5

補氣建中湯（濟生）

人參 朮 茯苓各 3.0 陳皮 蒼朮各 2.5 黄芩 厚朴 澤瀉 麥門冬各 2.0

味麥益氣湯

黄耆 人參 朮各 4.0 當歸 3.0 陳皮 生薑 大棗 柴胡 五味子各 2.0 甘草 1.5

升麻 0.5 麥門冬 5.0

妙功十一丸（儒門）

丁香 沈香 木香 乳香 麝香 三稜 莪朮 牽牛子 黄連 雷丸 鶴蝨 胡黄連

黄芩 大黃 陳皮 青皮 雄黄 甘草 熊膽 赤小豆 丁香 輕粉 巴豆

木通散（産科癸蒙）

木通 香附子 陳皮 烏藥 木瓜 蘇葉各 3.0 甘草 生薑各 1.0

養血安神湯（回春）

當歸 川芎 芍藥各 3.0 酸棗仁 黄連 柏子仁 甘草各 1.5 陳皮 2.5 地黄 茯神各 3.5

抑肝散加陳皮半夏湯（本朝經驗）

當歸 釣藤 川芎各 3.0 朮 茯苓各 4.0 柴胡 2.0 甘草 1.5 陳皮 半夏各 3.0

抑肝扶脾散（古今医鑑）

黄連 青皮 陳皮 神麴各 2.0 白朮（又は蒼朮）茯苓 龍胆 白芥子 山查子各 2.5 胡黄連 柴胡 甘草 1.0 人參 1.5

六君子湯（薛已）

人參 白朮 茯苓 半夏各 4.0 陳皮 大棗各 2.0 甘草 1.0 乾生薑 0.5

【青皮】

傷寒論・金匱要略共に青皮の記載なし

大塚・矢数処方分量集より「青皮」を検索

加減瀉白散（東垣）

桑白皮 3.0 地骨皮 知母 陳皮 桔梗各 1.0 青皮 細辛 黄芩 甘草各 2.0

葛花解酲湯（弁惑論）

白豆蔻 縮砂 葛花各 6.0 木香 1.5 青皮 1.0 茯苓 陳皮 猪苓 人參各 2.0 朮 神麴 澤瀉各 3.0 乾薑 1.0

九味清脾湯（濟生）

青皮 厚朴各 2.0 柴胡 黄芩 半夏 朮各 3.0 茯苓 4.0 大棗 草菓各 1.5 乾生薑 甘草各 1.0

柴胡疎肝湯（統旨）

柴胡 6.0 芍藥 香附子 川芎各 3.0 枳實 甘草 青皮各 2.0

七味清脾湯（三因）

厚朴 青皮各 3.0 半夏 5.0 烏梅 草菓各 2.5 甘草 大棗各 2.0 良姜 生薑 各 0.5

消痞飲（濟生方）

人參 神麴 茯苓 朮各 4.0 黄連 青皮 縮砂 甘草各 2.0 胡黄連 1.0

小柴胡湯療癰加味方（傷）

柴胡 7.0 半夏 5.0 生薑（乾 1.0）4.0 黄芩 大棗 人參各 3.0 甘草 2.0 貝母

夏枯草各 3.0 括蔞根 牡蛎 青皮各 2.0

清上飲（寿世保元）

柴胡 半夏各 3.0 黄芩 芍藥 梔子 鬱金 青皮 大黃 芒硝各 2.0 厚朴 枳實

生薑（乾 1.0）各 1.5 黄連 甘草各 1.0

大七氣湯（濟生方）

三稜 莪朮 青皮 陳皮 桔梗 藿香 香附子 益智 桂枝各 4.0 甘草 1.0

治肩背拘急方（本朝經驗）

茯苓 青皮 香附子 烏藥各 4.0 莪朮 3.0 甘草 1.0

分心氣飲（局方）

桂枝 芍藥 木通 半夏 甘草 大棗 生薑（乾 1.0）燈心草各 1.5 桑白皮

青皮 陳皮 大腹皮 羌活 茯苓 蘇葉各 2.0

妙功十一丸（儒門）

丁香 沈香 木香 乳香 麝香 三稜 莪朮 牽牛子 黃連 雷丸 鶴蝩

胡黃連 黃芩 大黃 陳皮 青皮 雄黃 甘草 熊膽 赤小豆 丁香 輕粉

巴豆

抑肝扶脾散（古今醫鑑）

黃連 青皮 陳皮 神麴各 2.0 白朮（又は蒼朮）茯苓 龍胆 白芥子 山查子

各 2.5 胡黃連 柴胡 甘草 1.0 人參 1.5

【枳實】

傷寒論中の枳實

〔七九〕傷寒下後，心煩腹滿，臥起不安者，**梔子厚朴湯**主之。

梔子厚朴湯方

梔子十四個擘 厚朴四兩去皮 枳實四枚浸水炙令黃

右三味，以水三升半，煮取一升半，去滓，分二服，溫進一服，得吐者，止後服。

〔一〇三〕太陽病，過經十餘日，反二、三下之，後四、五日，柴胡證仍在者，先與小柴胡湯。嘔不止，心下急，鬱鬱微煩者，爲未解也，與**大柴胡湯**下之，則愈。

柴胡半斤 黃芩三兩 芍藥三兩 半夏半升洗 生薑五兩切

枳實四枚炙 大棗十二枚擘

右七味，以水一斗二升，煮取六升，去滓，再煎，溫服一升，

日三服。㊟一方加大黃二兩，若不加，恐不爲大柴胡湯。

〔二〇八〕陽明病，脈遲，雖汗出不惡寒者，其身必重，短氣，腹滿而喘。有潮熱有潮熱者外欲解，可攻裏也。手足濇然汗出者，汗出者此大便已鞅也，**大承氣湯**主之。

若汗多，微發熱惡寒者，外未解也，其熱不潮，未可與承氣湯；

若腹大滿不通者，可與小承氣湯，微和胃氣，勿令至大泄下。

大承氣湯

大黃四兩酒洗 厚朴半斤炙去皮 枳實五枚炙 芒硝三合

右四味，以水一斗，先煮二物，取五升，去滓，內大黃，更煮取二升，去滓，內芒硝，更上微火一兩沸，分溫再服，㊟得下，餘勿服。

小承氣湯

大黃四兩 厚朴二兩炙去皮 枳實三枚大者炙

右三味，以水四升，煮取一升二合，去滓，分溫二服；㊟初服湯，當更衣，不爾者，盡飲之；若更衣者，勿服之。

〔二四七〕趺陽脈浮而濡，浮則胃氣強，濡則小便數，浮濡相搏，大便則

鞅，其脾爲約，**麻子仁丸**主之。

麻子仁二升 芍藥半斤 枳實半斤炙 大黃一斤去皮 厚朴一尺炙去皮

杏仁一升去皮尖熬

右六味，蜜和丸，如梧桐子大，飲服十丸，日三服，㊟漸加，以知爲度。

〔三一八〕少陰病，其人或咳，或悸，或小便不利，或腹中痛，或泄利下重者，**回逆散**主之。

甘草炙 枳實破水漬炙乾 柴胡 芍藥

右四味，各等分，搗篩，白飲和，服方寸匕，日三服。

咳者加五味子，乾薑各五分，並主下利；悸者加桂枝五分；小便不利者，加茯苓五分；腹中痛者，加附子一枚炮令圻；泄利下重者，先以水五升，煮薤白三莖，煮取三升，去滓，以散三方寸匕內湯中，煮取一升五半，分溫再服。

〔三九三〕大病差後，勞復者，**枳實梔子豉湯**主之。

枳實三枚炙 梔子十四個擘 豉一升綿裹

右三味，以清漿水七升，空煮取四升，內枳實梔子，煮取二升，下豉，更煮五六沸，去滓，溫分再服，復令微似汗。㊟若有宿食者，內大黃如博棋子五六枚，服之愈。

金匱要略中の枳實

〔三十〕瘧為病，一本「瘧」字上有「剛」字，胸滿，口噤，卧不着席，脚攣急，必齧齒，可與**大承氣湯**。

大承氣湯方

大黃（四兩，酒洗） 厚朴（半斤，炙去皮） 枳實（五枚，炙） 芒硝（三合）

右四味，以水一斗，先煮二物取五升，去滓，內大黃，煮取二升，去滓，內芒硝，更上火微一、二沸，分溫再服，得下止服。

『千金』三黃湯：治中風手足拘急，百節疼痛，煩熱心亂，惡寒，經日不欲飲食。

麻黃（五分） 獨活（四分） 細辛（二分） 黃耆（二分） 黃芩（三分）

右五味，以水六升，煮取二升，分溫三服，一服小汗，二服大汗。心熱加大黃二分，腹滿加枳實一枚，氣逆加人參三分，悸加牡蠣三分，渴加括蕢根三分，先有寒，加附子一枚。

〔一一七〕胸痺心中痞氣，氣結在胸，胸滿，脅下逆搶心，**枳實薤白桂枝湯**主之；

人參湯亦主之。「心中痞氣，氣結在胸」，趙本作「心中痞，留氣結在胸」。

枳實薤白桂枝湯方

枳實（四枚） 厚朴（四兩） 薤白（半斤） 桂枝（一兩） 括蕢實（一枚，搗）

右五味，以水五升，先煮枳實、厚朴，取二升，去滓，內諸藥，煮數沸，分溫三服。

〔一一八〕胸痺，胸中氣塞、短氣，茯苓杏仁甘草湯主之；**橘枳薑湯**亦主之。

『千金』、『外臺』無「橘枳薑湯亦主之」七字。

茯苓杏仁甘草湯方

茯苓（三味） 杏仁（五十個） 甘草（一兩）

右三味，以水一斗，煮取五升，溫服一升，日三服，不差更服。

橘枳薑湯方

橘皮（一斤） 枳實（三兩） 生薑（半斤）

右三味，以水五升，煮取二升，分溫再服。『肘後』、『千金』云治胸痺，胸中怫鬱如滿，噎塞習習如癢，喉中澀燥唾沫。

〔一二〇〕心中痞，諸逆心懸痛，**桂枝生薑枳實湯**主之。

桂枝生薑枳實湯方

桂枝 生薑（各三兩） 枳實（五枚）

右三味，以水六升，煮取三升，分溫三服。

〔一三〇〕病腹滿，發熱十日，脈浮而數，飲食如故，**厚朴七物湯**主之。

厚朴七物湯方

厚朴（半斤） 甘草（三兩） 大黃（三兩） 大棗（十枚） 枳實（五枚）

桂枝（二兩） 生薑（五兩）

右七味，以水一斗，煮取四升，溫服八合，日三服。嘔者加半夏五合；下利去大黃；寒多者加生薑至半斤。

〔一三二〕痛而閉者，**厚朴三物湯**主之。「痛而閉」，『脈經』作「腹滿痛」。

厚朴三物湯方

厚朴（八兩） 大黃（四兩） 枳實（五枚）

右三味，以水一斗二升，先煮二味，取五升，內大黃，煮取三升，溫服一升，以利爲度。

〔一三三〕按之心下滿痛者，此爲實也，當下之，宜**大柴胡湯**。

大柴胡湯方

柴胡（半斤） 黃芩（三兩） 芍藥（三兩） 半夏（半升，洗） 枳實（四枚，炙）

大黃（二兩） 大棗（十二枚） 生薑（五兩）

右八味，以水一斗二升，煮取六升，去滓，再煎，溫服一升，日三服。

〔一六二〕趺陽脈浮而澀，浮則胃氣強，澀則小便數，浮澀相搏，大便則堅，其脾爲約，**麻子仁丸**主之。

麻子仁丸方

麻子仁（二升） 芍藥（半斤） 枳實（一斤） 大黃（一斤） 厚朴（一斤）

杏仁（一升）

右六味，末之，煉蜜如丸，梧子大，飲服十丸，日三，以知爲度。

〔一九一〕支飲胸滿者，**厚朴大黃湯**主之。

厚朴大黃湯方

厚朴（一尺） 大黃（六兩） 枳實（四枚）

右三味，以水五升，煮取二升，分溫再服。

【附方】

『外臺』**茯苓飲**：治心胸中有停痰宿水，自吐出水後，心胸間虛，氣滿不能食。消痰氣，令能食（「自吐出水」，『外臺』作「自水吐出」）。

茯苓 人參 白朮（各三兩） 枳實（二兩） 橘皮（二兩半） 生薑（四兩）

右六味，水六升，煮取一升八合，分溫三服，如人行八九里進之。

〔二五二〕心下堅，大如盤，邊如旋盤，水飲所作，**枳朮湯**主之。

枳朮湯方

枳實（七枚） 白朮（二兩）

右二味，以水五升，煮取三升，分溫三服，腹中軟，即當散也。

〔二六七〕酒黃疸，心中懊懣，或熱痛，**梔子大黃湯**主之。

梔子大黃湯方

梔子（十四枚） 大黃（一兩） 枳實（五枚） 鼓（一升）

右四味，以水六升，煮取二升，分溫三服。

〔三三二〕下利膿語者，有燥屎也，**小承氣湯**主之。

小承氣湯方

大黃（四兩） 厚朴（三兩，炙） 枳實（大者三枚，炙）

右三味，以水四升，煮取一升二合，去滓，分溫二服，得利則止。

排膿散方

枳實（十六枚） 芍藥（六分） 桔梗（二分）

右三味，杵爲散，取鷄子黃一枚，以藥散與鷄子黃相等，揉和令相得，飲和服之，日一服。

〔三六八〕產後腹痛，煩滿不得卧，**枳實芍藥散**主之。

枳實芍藥散方

枳實（燒令黑，勿太過） 芍藥（等分）

右二味，杵爲散，服方寸匕，日三服，并主癰膿，以麥粥下之。

退五臟虛熱，**四時加減柴胡飲子方**

冬三月加：柴胡（八分） 白朮（八分） 陳皮（五分） 大腹檳榔（四枚，并皮子用）

生薑（五分） 桔梗（七分）

春三月加：枳實 減：白朮 共六味

夏三月加：生薑（三分） 枳實（五分） 甘草（三分） 共八味
 秋三月加：陳皮（三分） 共六味
 右各吹咀，分爲三貼，一貼以水三升，煮取二升，分溫三服。如人行四、五里進一服，如四體壅，添甘草少許，每貼分作三小貼，每小貼以水一升，煮取七合溫服，再合滓爲一服，重煮都成四服。疑非仲景方。

大塚・矢数処方分量集の「枳實」を検索

茵陳散（回春）
 茵陳蒿 枳實 梔子 厚朴 滑石各 2.0 猪苓 澤瀉 蒼朮各 3.0 茯苓 5.0
 黃連 燈心草各 1.5
 溫膽湯（千金）
 半夏 茯苓各 6.0 陳皮 2.5 竹茹 2.0 枳實 甘草 乾生薑各 1.0
 延經期方（方輿輓）
 續斷 蒲黃 枳實 括蕁仁 紫檀 滑石各 3.0
 延年半夏湯（外臺）
 半夏 5.0 生薑（乾 1.0） 桔梗各 3.0 枳實 吳茱萸各 1.0 柴胡 別甲 檳榔各 3.0
 人參 2.0
 回春茵陳散（回春）
 茵陳 梔子 茯苓 猪苓 澤瀉 蒼朮 枳實 黃連 厚朴 滑石各 3.0
 燈心草 2.0
 加味溫膽湯（回春）
 竹茹 枳實 人參 麥門冬各 3.0 半夏 茯苓 酸棗仁各 3.5 黃連 當歸 地黃 甘草
 山梔子各 2.0 辰砂 1.0
 加味小陷胸湯（証治大還）
 半夏 6.0 括蕁仁 3.0 枳實 梔子各 2.0 黃連 1.5
 括蕁湯（千金）
 括蕁實 生薑（乾 1.0）各 3.0 半夏 6.0 薤白 4.0 枳實 2.0
 括蕁枳實湯（回春）
 當歸 茯苓 貝母各 3.0 括蕁仁 桔梗 陳皮 黃芩各 2.0 乾生薑 砂仁 木香
 甘草 梔子 枳實 竹茹各 1.0
 甘露飲（局方）
 枇杷葉 石斛 黃芩 枳實 天門冬 麥門冬 乾地黃 熟地黃 茵陳 甘草各 2.0
 枳實薤白桂枝湯（金）
枳實 厚朴各 2.0 薤白 6.0 桂枝 括蕁實各 1.0
 枳實梔子豉湯（傷、金）
枳實 2.0 梔子 4.0 香豉 8.0
 枳實芍藥散（金）
枳實 芍藥各等分
 枳實大黃湯（寶鑑）
 大黃 4.0 羌活 2.0 當歸 1.5 枳實 1.0
 枳縮二陳湯（回春）
枳實 縮砂各 1.5 半夏 茯苓各 3.0 陳皮 香附子 厚朴 延胡索各 2.0 茴香 木香
 草蔻 乾生薑 甘草各 1.0
 枳朮湯（金）
枳實 6.0 朮 2.0
 橘皮枳實生薑湯（金）
橘皮 3.0 枳實 2.0 生薑 6.0（乾 1.5）
 逆挽湯（名古屋玄医）
 白朮 桂枝 人參各 3.0 茯苓 3.5 乾生薑各 1.5 枳實 2.0 甘草 2.5

桂枝生薑枳實湯（金）

桂枝 生薑（乾 1.5）各 6.0 枳實 3.0

厚朴三物湯（金）

厚朴 5.0 枳實 大黃各 2.5

厚朴七物湯（金）

厚朴 5.0 甘草 大黃各 2.0 大棗 桂枝各 1.5 枳實 3.5 生薑（乾 1.0）3.0

高沈無憂散（回春）

陳皮 半夏 茯苓 枳實 竹茹 麥門冬 龍眼肉 石膏各 4.0 人參 1.5 甘草 2.5

合璧飲（內科秘錄）

芍藥 4.0 黃芩 3.0 枳實 2.5 厚朴 大黃 大棗各 2.0 甘草 1.0

柴胡枳桔湯（蘊要）

柴胡 半夏各 5.0 生薑（乾 1.0） 黃芩 括蕒實 桔梗各 3.0 枳實 1.5 甘草 1.0

柴胡枳桔湯加葶藶（蘊要）

柴胡 半夏各 5.0 生薑（乾 1.0） 黃芩 括蕒實 桔梗各 3.0 枳實 1.5 甘草 1.0

葶藶 2.0

柴胡疎肝湯（統旨）

柴胡 6.0 芍藥 香附子 川芎各 3.0 枳實 甘草 青皮各 2.0

柴胡鼈甲湯（外臺）

柴胡 5.0 朮 4.0 芍藥 檳榔各 3.0 鼈甲 枳實各 2.0 甘草 1.5

滋血潤腸湯（統旨）

當歸 地黃 桃仁各 4.0 芍藥 3.0 枳實 葶各 2.0 大黃 1.5 紅花 1.0

四逆散（傷）

柴胡 5.0 枳實 2.0 芍藥 4.0 甘草 1.5

梔子厚朴湯（傷）

梔子 3.0 厚朴 4.0 枳實 2.0

梔子大黃湯（傷）

梔子 2.0 大黃 枳實各 1.0 香豉 6.0

芍藥湯（保命集）

芍藥 黃芩 黃連各 4.0 木香 當歸 枳實 檳榔各 2.0 大黃 甘草各 1.0

順氣和中湯（古今醫鑑）

陳皮 香附子 梔子各 2.5 茯苓 半夏 白朮各 3.0 黃連 枳實 神麴各 2.0 縮砂

甘草 乾生薑各 1.0

消痞湯（濟生）

白朮 茯苓 陳皮 半夏各 3.0 澤瀉 人參各 2.5 枳實 厚朴 縮砂各 1.5 黃連

乾生薑各 0.8

小承氣湯（傷）

大黃 枳實各 2.0 厚朴 3.0

椒梅湯（回春）

烏梅 蜀椒 檳榔 枳實 木香 縮砂 香附子 桂枝 川楝子 厚朴 甘草 乾薑

各 2.0

清上飲（壽世保元）

柴胡 半夏各 3.0 黃芩 芍藥 梔子 鬱金 青皮 大黃 芒硝各 2.0 厚朴 枳實

生薑（乾 1.0）各 1.5 黃連 甘草各 1.0

清中安蛔湯

黃連 黃柏 枳實 山椒各 2.0 烏梅 3.0

千金括蕒湯

括蕒實 生薑（乾 1.0）各 3.0 半夏 6.0 薤白 4.0 枳實 2.0

大柴胡湯（傷）

柴胡 6.0 半夏 生薑（乾 1.5）各 4.0 黃芩 芍藥 大棗各 3.0 枳實 2.0 大黃 1.0~2.0

大承氣湯（傷）

大黃 2.0 枳實 芒硝各 3.0 厚朴 5.0

治頭痛一方（和田東郭）

黃芩 黃連 大黃 枳實 乾薑 吳茱萸各 1.5 半夏 6.0 甘草 2.0

竹茹溫膽湯（寿世保元）

柴胡 竹茹 茯苓 麥門冬各 3.0 半夏 5.0 香附子 桔梗 陳皮 枳實各 2.0 黃連 甘草 人參 乾薑各 1.0

當歸白朮散（医学正伝）

白朮 茯苓各 4.0 當歸 黃芩 茵陳各 1.5 前胡 枳實 杏仁 甘草各 2.0 半夏 3.0 生薑（乾 1.0）2.0

當歸白朮湯（三因）

白朮 茯苓 當歸 杏仁 半夏各 4.0 猪苓 2.5 茵陳 枳實各 1.5 甘草 1.0 前胡 3.0

當歸養血湯（回春）

芍藥 熟地黄 茯苓 當歸各 3.0 貝母 括蕪實 枳實 陳皮 厚朴 香附子 川芎 蘇子各 1.5 沈香 黃連各 1.0

人參養榮湯（聖濟）

柴胡 6.0 桑白皮 阿膠 桔梗 人參各 3.0 貝母 杏仁各 2.0 茯苓 4.0 五味子 甘草 枳實各 1.5

排膿散（金）

枳實 芍藥各三分 桔梗一分 卵黃一個

敗毒湯（香川家）

柴胡 獨活 桔梗 川芎各 3.0 枳實 甘草 生薑（乾 1.0）各 2.0 茯苓 5.0

茯苓飲（金）

茯苓 5.0 朮 4.0 人參 生薑（乾 1.0）橘皮各 3.0 枳實 1.5

茯苓飲合半夏厚朴湯

茯苓 5.0 朮 生薑（乾 1.0）4.0 人參 橘皮 厚朴各 3.0 枳實 1.5 半夏 6.0 蘇葉 2.0 分消湯（回春）

蒼朮 茯苓 朮各 1.5 陳皮 厚朴 香附子 猪苓 澤瀉各 2.0 枳實 大腹皮 縮砂 木香 乾薑 燈心草各 1.0

變製心氣飲（本朝經驗）

茯苓 半夏各 5.0 桂枝 木通 檳榔各 2.5 蘇子 別甲 枳實各 2.0 桑白皮 甘草 吳茱萸各 1.0

麻子仁丸（金）

麻子仁五分 芍藥 枳實 厚朴各二分 大黃四分 杏仁二分

養肺湯（聖濟）

柴胡 貝母各 3.0 茯苓 杏仁各 4.0 阿膠 桔梗 桑白皮 人參各 2.0 枳實 五味子 甘草各 1.5

良枳湯（療治大槩）

茯苓 半夏各 6.0 桂枝 大棗各 4.0 甘草 枳實各 2.0 良姜 1.0

連翹湯（眼科）

連翹 黃芩 麻黃 川芎各 3.0 甘草 大黃 枳實各 2.0

連翹湯（丹毒）

連翹 黃芩 麻黃 升麻 川芎 甘草各 1.5 大黃 枳實各 2.0

【枳殼】

傷寒論・金匱要略に枳殼の記載なし

大塚・矢数処方分量集より「枳殼」を検索

烏藥順氣散（局方）

烏藥 陳皮 殭蚕 麻黃 川芎 桔梗各 2.5 枳殼 2.0 白芷 甘草各 1.5 乾生薑 1.0

解勞散（楊氏）

芍藥 6.0 柴胡 鼈甲 枳殼各 4.0 甘草 茯苓 大棗各 2.0 乾生薑 1.0

加減涼膈散（回春）

連翹 黃芩 梔子 桔梗 黃連 薄荷 當歸 枳殼 芍藥 地黃各 2.0 甘草 1.5

加味承氣湯（回春）

大黃 枳殼 厚朴 當歸各 3.0 芒硝 5.0 紅花 甘草 2.0

活血散瘀湯（外科正宗）

川芎 當歸 芍藥 牡丹皮 瓜子 桃仁各 2.5 蘇木 枳殼 檳榔 大黃各 2.0

荊芥連翹湯（回春）

荊芥 連翹 防風 當歸 川芎 芍藥 柴胡 枳殼 黃芩 梔子 白芷 桔梗各 2.0 甘草 1.5

荊芥連翹湯（一貫堂）

當歸 芍藥 川芎 地黃 黃連 黃芩 黃柏 梔子 連翹 防風 薄荷 荊芥 甘草 枳殼各 1.5 柴胡 白芷 桔梗各 2.0

荊防敗毒散（回春）

荊芥 防風 羌活 獨活 柴胡 前胡 薄荷 連翹 桔梗 枳殼 川芎 金銀花 茯苓 各 2.0 甘草 1.0

行氣香蘇散（醫鑑）

香附子 蘇葉 陳皮 烏藥 羌活 川芎各 2.5 麻黃 枳殼各 2.0 乾生薑 甘草各 1.0

五積散（局方）

蒼朮 陳皮 茯苓 朮 半夏 當歸各 2.0 厚朴 芍藥 川芎 白芷 枳殼 桔梗 乾薑 桂枝 麻黃 甘草 大棗各 1.0

柴胡疎肝湯（一貫堂）

當歸 芍藥 川芎 地黃 桃仁 牡丹 柴胡 桂枝 陳皮各 3.0 枳殼 紅花 甘草 大黃 芒硝各 1.5

實脾湯（回春）

蒼朮 茯苓 朮各 2.5 陳皮 厚朴 香附子 猪苓 澤瀉各 2.0 枳殼 大腹皮 縮砂 木香 乾生薑 燈心草各 1.0

十六味流氣飲（回春）

當歸 川芎 芍藥 人參 桔梗 桂枝各 2.5 白芷 黃耆 木香 烏藥 厚朴 枳殼 檳榔 防風 蘇葉 甘草各 1.5

潤腸湯（回春）

當歸 熟地黃 乾地黃各 3.0 亞麻仁 桃仁 杏仁 枳殼 厚朴 黃芩 大黃各 2.0 甘草 1.5

參蘇飲（局方）

蘇葉 枳殼 乾生薑 木香 甘草各 1.0 桔梗 陳皮 葛根 前胡各 2.0 半夏 茯苓 各 3.0 人參 大棗各 1.5

腎炎一方（新中國經驗方）

茯苓 6.0 澤瀉 猪苓各 4.0 半夏 芍藥各 3.0 厚朴 2.5 陳皮 2.0 枳殼 甘草各 0.5

清上防風湯（回春）

川芎 黃芩 連翹 防風 白芷 桔梗 梔子各 2.5 荊芥 黃連 枳殼 甘草 薄荷各 1.0

清熱解鬱湯（回春）

山梔子 蒼朮各 3.0 川芎 香附子 陳皮各 2.0 黃連 甘草 枳殼各 1.0 乾薑 生薑 各 0.5

清涼飲（回春）

梔子 連翹 防風 枳殼各 2.5 黃芩 當歸 地黃 桔梗各 2.0 黃連 甘草 薄荷各 1.0

通導散（回春）

大黃 枳殼 當歸各 3.0 芒硝 4.0 厚朴 陳皮 木通 紅花 蘇木 甘草各 2.0

成分比較（注：陳皮と枳實は薬局方と原色和漢薬図鑑よりの比較、橘皮は和漢薬図鑑より）

精油	オハミカン（橘皮）	ウツユミカン（陳皮）	ダイダイ（枳實）
-pinene			
-pinene			
D-Limonene 発汗・去痰、芳香性健胃薬	（主成分）	（90%）	（主成分）
-phellandrene			
P-cymene			
-terpinene		（6%）	
Linalool			
Linalyl acetate			
-elemene			
-copaene			
-humulene			
-sesquiphellandrene			
-humelenol acetate			
-elemol			
Myrcene			
-farnesene			
-elemene			
-cadinene			
-cubebene			
-thujene			
-terpineol			
Citral（犬猫の忌避剤） （アリの警報ホルモン）			
Geranyl acetate			
Methyl anthranilate			
Citronellal			
Geraniol（バラの香り）			
フラボノイド			
Hesperidin			
Neohesperidin			
Naringin			
クマリン類			
Umbelliferone			
Auraptene			
Citropten			
Isoimperatorin			
Imperatorin			
苦味質			
Limonin			
Aurantiamarin			
その他			
Vitamin C			
Synephrine			
ペクチン			
クエン酸			

陳皮の煎剤は、ハブの胃造設イヌ空腹時経口投与又は舌表面及び口腔粘膜塗擦で軽度の胃液

分泌亢進、パンプン作用低下、リパーゼ作用亢進。ウサギ胃内投与で胃運動亢進。水製エキスはラット経口投与で受身皮膚アフィキンを抑制。熱水製エキスはラット摘出子宮筋のセトニンによる収縮に対して拮抗作用を示す。これは synephrine の作用と推定される。Synephrine にはエルモット摘出気管の収縮抑制作用も認められる。

メタノールエキスは、ラット腹腔肥満細胞からのヒスタミン遊離を抑制する。(hesperidin、nobiletin の作用。両化合物は、経口投与で受身皮膚アフィキンを抑制)

また、メタノールエキスは経口投与でラットにおいて -naphthylisocyanate 誘発肝臓障害に対して防御効果を示した。

Hesperidin には、肝細胞障害抑制作用が報告されている

枳實の煎出エキスはウサギ摘出腸管運動を抑制。又、水製、50%メタノール又は 50%エタノールエキス或いは polymethoxyflavone 類は抗アレルギー作用を示す。熱水抽出エキスはラット摘出子宮筋のセトニンによる収縮に対して拮抗作用を示す (synephrine の作用)。エキス及び synephrine は、仮における実験で心臓機能を促進し、末梢血管抵抗を増大させ、エタノールエキスは虚血性心疾患、血栓症などの患者血液から得た血小板の凝集を抑制する。Naringin、neohesperidin、には、抗炎症作用が報告されている。

4 種の柑橘類未熟果実の 50%エタノールエキスの薬理作用を検討し、抗ヒスタミン作用は甘夏エキスが、冠状血管拡張作用は夏橙エキス、抗セトニン作用は夏橙、甘夏両エキスが作用を示し、また、-アドレナリン様刺激作用、小腸弛緩作用、子宮弛緩作用、抗喘息作用は 4 種が同程度の効力を示した。

1. 抗酸化性ビタミン

抗酸化性ビタミンにはトコフェロール(ビタミン E)、アスコルビン酸(ビタミン C)、ロテノイド(プロビタミン A)があり、温州ミカンにはそれぞれ果肉 100g に 1.9mg, 35mg, 0.1mg 程度含まれています。これらのビタミン類の働きには、ビタミンの作用の他に紫外線、炎症、過激な運動等により体内に生じた活性酸素を消去し、生体を防御する一端を担っていると推定されています。

ところでこの活性酸素は体内のタンパク質、核酸、脂質を酸化して細胞に障害を与え、この細胞の障害が癌、心臓疾患の発生、あるいは老化現象等に関係があるといわれ注目されている物質です。このような成分を消去する抗酸化性ビタミンが癌や循環器系の疾病、老化防止等に有効であるといわれているところです。

2. フラボノイド

柑橘類に含まれているフラボノイドを分類するとフラボン、フラバノン、フラボノール、アントシアニジンの 4 グループに分けられます。温州ミカンに含まれているフラボノイドの機能成分は、フラバノンのヘスペリジンといい、果肉 100g 中 0.1g に達するものもあります。

このヘスペリジンは毛細血管の強化作用や抗アレルギー作用、抗ウイルス作用が確認されています。また、フラボンの C - グリコシルフラボンには血圧降下作用のあることが知られています。

3. ペクチン

ペクチンは食品のゲル化剤や乳化剤としてジャムやゼリー、冷菓などに使用されています。

温州ミカンの果肉にもペクチンが含まれていますが、体内では消化されないので可溶性の食物繊維としてとらえることができます。ペクチンなど食物繊維の機能性として、整腸作用、血糖値調節機能、血中脂質調節機能などが上げられています。

また、ペクチンをアルカリにより加水分解し低分子化したものを経口投与すると、前立腺癌の移転を抑制するなどの報告もあります。

温州ミカンの果肉中の機能成分についてはカロテノイドやフラボノイドなどまだまだ多くの種類が存在し、今後新たな機能性の評価研究により新しい機能成分の解明なども期待されます。

(参考文献：園芸学会平成 8 年度秋期大会シンポジウム講演要旨)

それぞれの主成分であるリモネンは、発泡スチロールのリサイクルに利用。発泡スチロール回収車の中にリモネンが使われ発泡スチロールのみを溶かし分別する。

天然柑橘油D - リモネンは、頑固な油脂類、特に油汚れに強い洗浄力を発揮します。

食器洗い用：食器具全般、殺菌効果の必要なまな板、安心して使えるほ乳瓶

手洗い用：殺菌作用を必要とするお子さまの手、肌荒れを気にする人

魚やゴミの悪臭のついたて、機械油で汚れた手

強力一般用：ガスレンジ、換気扇、頑固な汚れ

「古事記」・「日本書紀」の原文とされる「秀真伝」では、橘は特別に重要な意味もっていて、橘がたびたび政事を行う上で重要な意味をもつ樹木とされる記述が多数見受けられる。

以下に「完訳秀真伝」から橘に関係のあるところを抜粋してみた。

【序-五】瓊々杵尊の御世

	御子忍穂耳尊は
日高見の	多賀のコウにて
国治む	孫火之明尊
香久山 の	飛鳥の宮に
御座します	弟瓊々杵尊は
新田なす	新治の宮の
十八万に	新民殖ゑて
名も高き	原見の宮に
民お治し	ついに磯輪上
秀真なる	六十万年の
世お知りて	雷別くる
稜威の神	時に大御神
曰ふは	今瓊々杵尊の
幸御魂	国常立尊の
術御魂	顕はる稜威と
考なえて	別雷の
天君と	名付け賜はる
世のはじめ	今天皇の
天君は	みな瓊々杵尊の
稜威による	

香久山：奈良県橿原市南東部にある天香久山のこと

【二-七】国常立尊の御子

	天の神代の
七代目お	嗣ぐ糸口は
常世神	木の実東に
植ゑて生む	葉木国の神
日高見や	高天原に祭る
天御中主神	橘植ゑて
生む御子の	高皇産霊お
諸讃ゆ	木の常立尊や
その御子は	天鏡神
筑紫治す	大瀦莫尊も受く
この御子は	天万神

素阿佐治し 沫蕩尊折蕩尊生めば
 沫蕩尊は 根の白山本
 千足まで 法も通れば
 生む御子の 諱高仁尊
 神漏伎や

橘：祭政の事始めの神籬依代（ひもろぎよりしろ）としての重要な神木

ひもろぎ【神籬・昨・臈】



ひもろぎ（古くは「ひもろき」。なお、この「き」は甲類音であって、乙類音である「木」「城（き）」とは別）

1 （神籬）上古、神祭のとき、清浄の地を選んで、周囲に常磐木を植えて神座としたもの。後世、神社または臨時に神を招請するために室内・庭上などに立てた榊（さかき）もいう。のちには、神社をもいう。

2 （昨・臈）(1)に供える物の意) 神に供える米・餅・肉など。(太陽エネルギーの籠もった食物 秀真文字のヒ印ゲ)

よりしろ【依代】

よりしろ神霊が出現するときの媒体となるもの。神霊の寄りつくもの。正月の年神の依代としての門松などのような特定の枝葉や花・樹木・岩石、あるいは形代（かたしろ）・よりましなど種類が多い。

【四-二】秀真 日高見 原見山

「昔この 国常立尊の
 八降子 木草お苞の
 秀真国 東遙かに
 波高く 立ち登る日の
 日高見や 高皇産霊尊と
 国すべて 常世の花お
原見山 香久山となす
 五百継の 真栄木も植系

常世の花：香久橘の花のこと

原見山 香久山となす：富士山を香久の木にちなみ香久山と讃えた。一般には橿原市の天香久山しか知られていないが秀真では、富士山（原見山）も指す。

【五-二】アワ歌の起源

「二神の 瀛壺に居て
 国生めど 民の言葉の
 悉曇り これ直さんと
 考えて 五音七道の
 アワ歌お 上二十四声
 伊弉諾尊と 下二十四声
 伊弉冉尊と 歌ひ連ねて
 教ゆれば 歌に音声の
 道開け 民の言葉の
 整えば 中国の名も
 淡国や 筑紫に行幸

橘お
道なれば
民お治す

植系て常世の
諸神受けて

【五-三】月読尊の誕生

	魂の緒留む
宮の名も	緒留橘の
アワキ宮	御子生れませば
望杵尊と	名付けて至る
素阿佐国	析蕩尊の子の
伊予津彦命	歌に言葉お
習わせて	二名お求む
沫津彦命	素戔国に至りて
宮造り	静かに居ます
紀志伊国	橘植系て
常世里	

【六-十二】香久宮と大内宮

御子すべて	五男三女なり
南の殿に	橘植系て
香久の宮	東に桜植系
大内宮	親ら政
聞こし召す	あまねく民も
豊かなり	月読尊の妻
伊予津姫	生む望高は
伊吹戸主命	

南殿の橘は国常立尊の常世の道を象徴するもの。東殿の桜は天照神の中宮である瀬織津姫（向津姫）の父君の桜内命が奉呈したことが【二十四-二十二】に記されていて、伊勢の道の正否を占う神木として桜が植えられた。

【七-一】白人・胡久美の悪業

諸神の	祥禍お立つとき
細矛国より	兵主命が
香久宮に	雉子飛ばせて
「益人が	民のサシミ女
妻となす	棕子姫生めば
慈しみ	兄の胡久美お
子のごとく	細矛千足国の
益人や	今は添えなり
棕杵命が	罷れるときに
白人お	根国の益人に
棕子姫	身お立山に
納むのち	母子お捨て、
津に送る	胡久美母子お
犯す罪	神狭日命これお
糾さねば	臣これお請ふ」

香久宮：天照神の坐す、伊雑宮の南殿のこと。橘を植え香久宮と称える

【七-十六】常世の踊

神かがり	深く議りて
思兼命	常世の踊

永幸や 俳優歌ふ
香久の木 枯れても匂ゆ
しほれても良や あが妻
あわ わが妻あわや しほ
れても良や あが妻 あわ
諸神は 岩戸の前に
光門鶏 これぞ常世の
永幸や

香久の木：橘のこと、天照神の坐す、伊弉宮の南殿の橘ことをたとえたもの

【八・十九】天照神の行幸

またハタレ 日隅・日高見
香久山と 二岩浦に
告ぐ黄楊の 櫛の齒引けば
諸神は 高天原に議り
行幸とぞ 願ふば神の
行幸なる

香久山：天香久山のこと

【八・二十六】アエの道討伐

千早より アメエの道が
大御神に 事語らんと
呼ばしむる 君伊吹戸主命に
鎮めしむ 伊吹戸主命は
行幸輿 ハタレが問わく
「神頭か」 答えて「神の
奴なり」 また問ふ「奴
輿は何」 曰く「汝お
奴とせん ゆえに乗るなり」
またハタレ 「汝若蠅
恥見する 奴とせん」と
鳴り巡る ハタ、雷
伊吹戸主命は ウツロ斗招き
これお消す 叢雲被ひ
晦せば 級戸辺神お招き
吹き払ふ 炎お吐きて
室焼けば 竜田姫神招き
これお消す ハタレ噎んで
木の葉して 礫霰に
民攻める 味方率れ来て
香久入れて 打ちこぼさせば
ハタレまた 奪ひ食む間に
捕り縛る ハタレも率れし
魔はスバ斗 見て驚けば
考ゑて 法螺貝吹かせ
魔領巾消し 香久食らせ
これお討つ ハタレ槌以て
神お打つ 神は和幣に
打つ槌の 破れて海桐花の
葉扇や こゝにハタレが
胸騒ぎ 逃ぐるお掴む

手力雄命 ついに蔽の
 縄縛り 「汝奴と
 なすべきや なるや」といえど
 物いわず 斬らんとすれば
 伊吹戸主命 留めてこれも
 誓いなす 日増すの者魔
 天狗影 炎も逃れ
 「ちわやふる 神の恵み」と

香久：橘の実

【八-二十八】論功行賞

「香久山お 掌れ」とて
 香取神

カトリの語源

【十一】出雲の大宮

二十五鈴 九十三枝年の
 サアエ夏 香久枝萎みて
 太占の

香久枝：国常立尊の常世の道の象徴としての橘

【十四-二】カガノノンテン

カガノノンテン
 揃ふとき 左は谷に
 桜内命 御世の桜の
 均し歌 右は大山
 香久祇命の 時じく香久の
 祝ひ歌

時じく香久：橘のこと。南殿香久宮に橘が植えられている。

【二十一】火之明尊の葦原国派遣

告げ文お 香久山命雄鹿に

【二十三】随神たち

香久山命は 大山祇命の二子

【三七-二十】田島間守と常世国

日本書紀

古事記

勅	九十穗二月	九十年春二月庚子朔	
田島間守	「香久お求めに	天皇命	又天皇
わが思ふ	常世に行けよ	(是三宅連之始祖也)	以三宅連等之祖
御世の花	国常立尊の	田島間守、遣常世国	名多遲摩毛理、遣常世国
七月初日	九十九穗サシエ	令求非時香菓。今謂	令求登岐士玖能迦玖能木実
百三十七	君罷る歳	橘是也	其登岐士玖能迦玖能木実者
四十八夜	御子の喪衣入り	九十九年	是今橘也。
十二月十日	埴立物し	秋七月戊午朔、	此天皇御年
御送りの	菅原伏見に	天皇崩於纏向宮。	壹佰伍拾参歳
神の行幸ぞ	松明も輝く	時年百四十歳	御陵在菅原之御立野中也
		冬十二月癸卯朔壬子	
		葬於菅原伏見陵。	

たじまもり【田道間守】

新羅王子天日矛（あめのひばこ）の子孫。記紀に垂仁天皇のために常世国（とこよのくに＝長生不死の国）に渡り、非時香菓（ときじくのかくのこのみ＝橘）を持ち帰った話が伝えられている。三宅連（みやけのむらじ）の祖という。

【三七-二一】田島間守の殉死

明る春	三月に帰る	明年春三月辛未朔壬午、	
田島間守	時じく香久つ	田島間守、至自常世國。則	故、多遲摩毛理、遂到其國
二十四籠	香久の木四竿	齋物也、非時香菓	採其木実
株四竿	持ち来る間に		以纒八纒、矛八矛
君罷る	土産半ばお	八竿八纒焉	将来之間
わが宮え	半ばお君の	田島間守	天皇既崩
御陵に	捧げ申さく		爾多遲摩毛理、
「これ得んと遙かに行きし	於是、泣歎之曰		分
常世とは	神の隠れの	受命天朝、遠往絶域	纒四纒、矛四矛、獻于天后
およびなき風習お馴染むの	萬里蹈浪、遙度弱水		以纒四纒、矛四矛、獻置天皇
十年ぶり	あに思ひきや	是常世國、則神仙秘匿	之御陵戸而、捧其木實、
凌ぎ得て	さら帰るとは	俗非所臻。是以、往来之間	叫哭以白、
天皇の	奇し日に依りて	自經十年。豈期、	常世國之登岐士玖能迦玖能木
帰る今	すでに去ります	獨凌峻瀾、更向本土乎。	實、持參上侍、遂叫死也。
臣生きて	何かせん」とて	然賴聖帝之神靈、僅得還来	
追ひ罷る		今天皇既崩。不得復命。	
【三七・二二】田島間守の妻子		臣雖生之、亦何益矣。	
諸も涙で		乃向天皇陵。	
香久四本	殿前に植ゑ	叫哭而 自死之。	
香久四本	菅原に植ゆ	群臣聞皆流涙也	
遣し文	御子見給ひて	田島間守、是三宅連之始祖也	
「香久君が	花橘は		
かれが妻」	押山命遣りて		
呼ばしむる	父元彦と		
上り来る	御子喜びて		
元彦に	許し衣賜ひ		
喪お勤む	花橘が		
五月待つ	夜半に生む子に		
勅	「昔の人の		
緒お留む	弟橘」と		
名お賜ひ	似たる姿の		
押山命に	嫁ぐ母御も		
御恵み	深き由縁の		
例しなるかな			
【三十九・七】田島間守の遺言			
	先に田島間守が		
遣し文	「国染まざれば		
香久の木お	得んと思えば		
橘の	元彦が館に		
年経りて	馴染みて巡る		
日高見君と	島津の君に		
相知りて	や、得て香久お		
曳かぬ間に	君神となる		
千々悔み	今若宮に		
奉る	君僕が		
元彦に	結ぶ雫の		
源お	思して秀真		
治ろし召せ」			
【三十九・八】相模の小野城			

	こゝに天皇
竹内宿禰と	語り相せて
秀真国	香久元彦お
味方になして	橘姫と
穂積テシ	桜根マシお
先に遣り	軍下れば
日高見君が	招く元彦
諸かず	相模の小野に
城構え	テシとマシらと
守り固む	

以上が、橘について記述されている部分である。

さて、ご覧になると分かるように『ホツマツタエ』の文章はすべて五七調で書かれています。又ここでは、漢字と仮名で表記されていますが、これはあくまで翻訳者の訳字です。原本はホツマ文字と呼ばれる古代文字で表現されています。五七の十二文字を一行にして、一万行からなる一大叙事詩です。日本の旧約聖書と目す人もおります。(此の5行、大友一夫先生 天照神と養生法より引用)

垂仁天皇の勅で、常世の国に橘を求めに行くくだりは太字で記載しましたが、「秀真伝」と「紀・記」の比較ができるところです。また秀真伝の真髓がわかる所でもあります。

従来、常世国の意味・内容について説は

「トコ」とは、「床」の意であり、その床と岩の合成語の「床岩」から転じて永久不変の意。「ヨ」は世の意。常在不変の国を指すという国語学の見地からするものをはじめ、海原の遠い限りの彼方に予想せられた靈魂の帰着する「祖霊の国」であるという折口信夫の見解に代表される民族学的見地からするもの、中国の神仙思想の日本への伝来により、長生不死の国を表す語として造出されたものが、その原義を失い海外の国を指すようになったものとする津田左右吉の見解に代表される神仙思想との関連を重視するものなどさまざまであるが、いまだ決定的な説は出されていない。

常世国を外国と見なした飯田武郷など一部の論者を別にすれば、従来の諸説の大半は、常世国を形而上の世界としている。ちなみに、小学館の日本国語大辞典の記載を下に記した。

とこ よ【常世】

とこよ1 (形動) 永久に変わらないこと。いつまでも続いているもの。永久。永遠。

* 古事記 下・歌謡「あぐら居の神の御手もち弾く琴に舞する女登許余(トコヨ)にもかも」

2 =とこよ(常世)1の国*万葉 七二三「常呼(とこよ)にとわが行かなくに」

の神(かみ) 常世の国から来て、人間に長寿・富を授けると考えられていた神。

の国(くに) 1 古代人が、海のむこうのきわめて遠い所にあると考えていた想像上の国。現実の世とはあらゆる点で異なる地と考えた国で、後に、不老不死の理想郷、神仙境とも考えられた国。常世。 2 とこつ(常)国

の木(こ)の実(み) 常世の国から持って来たという木の実。橘の果実。ときじくのかくのこのみ。

の長鳴(ながなき)の鳥 (天照大神が天岩屋に籠ったときに集めて鳴かせた故事から)「にわとり(鶏)」の異名。

の虫(むし) 常世の国にいた不思議な霊力を持つという虫。

ところが、「秀真伝」を見ると、常世国は国常立尊が「常世の道」をもって治めた国を示していることが明らかになるのです。また、五紋において伊弉諾尊、伊弉冉尊の二神が「筑紫に行幸 橘お 植糸て常世の 道なれば 諸神受けて 民お治す」【五・二】という記述があることにより、「常世の道」と「橘」が政事を行う上で重要な意味を有することがうかがわれるのです。【二・七】に「常世神 木の実東に 植糸て生む 葉木国の神 日

高見や 高天原に祭る 天御中主神 橘植えて 生む御子の 高皇産霊お 諸讃ゆ」とあり、国常立尊、常世国、常世の道、橘の間の密接な関連が明らかになる。しかも、四紋には、国常立尊の御子神である国狭槌尊が「常世の花お 原見山 香久山となす」【四-二】と記され、国狭槌尊が父国常立尊の教えである「常世の道」にしたがい国を治めたことがうかがえるわけです。

（「常世の花」：かぐわしい花を咲かせる香久の木、すなわち橘のこと）

また、天照神の御世、素戔鳴尊の乱行により、天照神が岩屋戸に隠れた際のこととして【七-十六】に諸臣協議して、「香久の木 枯れても匂ゆ しほれても良や あが妻 あわあが妻あわや」と歌い踊って天照神をなんとか岩屋戸から引き戻そうとしたというのである。この和歌の意味するものは、天照神が伊雑宮に坐したときに、南の殿居に橘を植え香久宮と称え、また、東の殿に桜を植え大内宮とし、親ら政事を執り行い、民があまねく豊かになったという六紋の記述を踏まえて、「香久の木 枯れても匂ゆ しほれても良や」と、天照神の政事の事始めとしての常世国を象徴した橘が、岩室に隠れたことにより枯れてしまったようだが、いまだ常世の国を偲ばせるような香りは、強く残っていることよと歌われたということであり、ここにも国常立尊の常世国とそれを象徴する橘と政事の密接な関係が示されています。

垂仁天皇の御世 田島間守を常世国に遣わすときの勅には、「香久を求めに 田島間守 常世に行けよ わが思ふ 国常立尊の御世の花」【三十七-二十】とあって、垂仁帝は、この勅を通して、天地開闢して間もなく国常立尊が治めていた春のような常世国を忍び、その象徴たる香久の木を求めに田島間守を遣わす意志を表明したのである。この国常立尊が常世の道によって治めた常世国を象徴する香久橘を植える行為は、常世国の祭政の復古を意味するものである。「秀真伝」による常世国の重要な特徴は、三十七紋などの記述によれば、常世国が漠然とした海の彼方の国や折口信夫のというような他界などといった形而上の世界ではないことにある。東北の日高見という地上世界であるということが文献的に明確に示されているのである。

さらに、二紋に「神その中に 生れまして 国常立尊の 常世国 八方八降りの 御子生みて みなその国お 治めしむ」とあるように 常世国そのものが、当初は日高見国のみをさすものではなく、天地開闢当時はじめて生み出された世界の八つの国々の汎称であったのであり、その後、時代が下るに連れて、世が乱れ、かろうじて常世国の風儀を残し伝えていたのが日高見であったことから、特に日高見をさすようになったということは秀真伝の記述からうかがえる。

（日高見：福島県勿来以北、津軽地方以南の新潟県を除く古代東北地方
と「完訳秀真伝」には、説明されている。）

常陸国風土紀にも茨城筑波周辺を日高見とする記述がある

信太の郡 東は信太の流海（霞ヶ浦）、南は榎の浦の流海、西は毛野の河、北は河内の郡である

「^{ふるおきな}古老^{なには}が^{ながら}曰^{とよさき}へらく、^{あめのしたしろ}難波の長柄の豊前の宮に 御宇^{あめのしたしろ} しめしし天皇（孝徳天皇）の御

世、^{みずのとうし}癸丑^{せうせんのかみつしなもののへのかふち}年（白雉四年、六五三） 小山上物部河内・大乙上物部会津等、^{たいいつかみつしなめひづ}総領^{すべをさむ}の高向

の^{まへつぎみ}大夫等^{ななももへ}にお願いして、筑波・茨城の郡から七百戸を分かちて信太の郡を置けり。この地は、本、日高見の国なり。云々」と、常世国と日高見国とを結びつける記述の存在もある。

【八-二十八】^アの討伐 抜粋

香久入れて 打ちこぼさせば
ハタレまた 奪ひ食む間に
捕り縛る ハタレも率れし
魔はスバ^サ 見て驚けば

考えて	法螺貝吹かせ
魔領巾消し	香久貪らせ
これお討つ	ハタレ槌以て
神お打つ	神は和幣に
打つ槌の	破れて海桐花の
葉扇や	

というくだりがあり、この香久が橘の実であるなら、甘い？ 食べやすい果実であると推測するのは妥当なことだろうか？
ミカン科の植物で甘い実をなすものは何であろうか？

タチバナ *Citrus tachibana* ミカン科 生薬名：橘皮（成熟した果皮）

学名：*Citrus tachibana* Tanaka

和名：タチバナ（古事記に記されており、命を受けて非時果菓を常世の国から持ち帰った、田島間守の名に由来するといわれる）

漢名：橘

中国名：橘柑

英名：*tachibana orange*

別名：ニッポンタチバナ（日本橘）、ハナタチバナ（花橘）、ニハミグサ（庭見草）、ムカシグサ（昔草）、トコヨグサ（常世草）、コウジ（柑子）

原産地と栽培適地

台湾と我が国では太平洋側では東海地方以西、日本海側では中国地方以西～沖縄までの沿岸部の常緑樹林内に野生の分布が見られる。

温暖で、日当たり、排水良好な腐植質に富む肥沃な土壤に適する。

食用：果実は生食できるが酸味が強い

ダイダイ *Citrus aurantium* var. *daidai* ミカン科 生薬名：橙皮（果皮） 枳實（未熟果実）

Citrus aurantium L. var. *daidai* Makino

Citrus：レモン樹 *aurantium*：aurum（黄金）

和名：ダイダイ：樹上に新旧代々の果実が付くことに由来

漢名：橙、代々

中国名：酸橙

英名：*bigarade, bitter orange*

別名及び方言：カイセイトウ（回青橙）

原産地と栽培適地

インド原産、広く温帯の各地で栽培される。中国より渡来し、古くから栽培されている。

食用：果実は食料にシロップ、マーマレード、精油は香料に使用する。

ウンシュウミカン *Citrus unshiu* ミカン科 生薬名：陳皮（果皮） 青皮（未熟果実の皮）

学名：*Citrus unshiu* Marcov

和名：ウンシュウミカン

漢名：温州蜜柑

中国名：温州蜜柑

英名：*Unshiu orange, satsuma mandarin*

別名及び方言：ウンシュウ、ミカン

原産地と栽培適地

日本原産、鹿児島県長島で約500年前に偶発実生により発生したと言われる。約200年前から全国で栽培されるようになった。栽培には、年平均気温が15度以上で、最低気温が-5度以下

にならない地域が望ましい。

カラタチ *Poncirus trifoliata* ミカン科 生薬名：枳實（未熟果実）

学名：*Poncirus trifoliata* (L.) Raf.

Poncirus：ミカンの一種のフランス名 *poncire* に由来する

Trifoliata：「*trifoliatus* = 三小葉の」の意味

和名：カラタチ、多くの語源説があるが、唐橘が略されてつけられたともいわれている。

漢名：唐橘、中国（長江上流）原産で、古い時代に渡来したタチバナの意味

中国名：枸橘、枳

英名：*trifoliata orange*, *hardy orange*, *three-leaved orange*

別名及び方言：枳殻、枳殻の音読みであるが、元来枳殻は中国産 *Citrus ichagensis*（ギシヨウキツ）などの果実より得た名である。

原産地と栽培適地

中国長江上流地域の原産で、北は河北、山東省から南は広東、広西チワン族自治区まで分布している。日本への渡来は古く、千余年前に中国から朝鮮半島を経て導入されたものと見られる。耐寒性が強く、国内では九州から北海道まで栽培され、ときに野生化している。

食用：果汁は酸味が強く、苦味があり油質物も含まれているので、生食には適していない。

からたち【枸橘・枳殻】

からたち（「からたちばな（唐橘）」の略）

- 1 ミカン科の落葉低木。中国原産で、古くから日本で栽植されている。幹は高さ二～三メートルになり、枝には稜角があり、やや扁平で、長さ三～六センチメートルの刺（とげ）が互生する。葉は互生し三小葉からなる複葉で、各小葉は卵形で縁に細かい鋸歯があり、葉柄には狭い翼がある。晩春、葉に先だって径五センチメートルほどの白色の五弁花が葉腋に単生する。果実は径約五センチメートルの球形で黄熟して芳香があるが、食べられない。漢方で乾燥して健胃薬にする。古くから生垣に用いられる。きこく。《季・春》
- 2 （南橘北枳（なんきつほくき）のたとえによる。「きちがい（木遣）」の語呂（ごろ）合わせから）気違い。狂気。＊洒・契情買虎之巻 —「まづなたまめ、からたちのきづかひもなし」
- 3 （1の花ことば、「わたしは胸を痛めています」から）女学生用語で、胸をわずらっている人。肺病の人。
- 4 「さるとりいばら（・・）」の異名。

に成（な）る（江南の橘（たちばな）が江北に移されて枳（からたち）になるという中国のことわざによる語。木が変わるところから）気が変わる。心をいれかえる。改心する。＊雑俳・柳多留 七「からたちに成てかん当ゆるす也」

いちご【枳殻苺】「とっくりいちご（徳利苺）」の異名。

でら【枳殻寺】 東京都文京区にある、麟祥院（りんしょういん）の通称。

からたちばな【唐橘】

からたちばな1（中国から渡来した橘（たちばな）の意）からたち（枸橘）1

- 2 ヤブコウジ科の常緑低木。関東以西の林中に生え、また、観賞用に栽植される。茎は直立し高さ約四〇センチメートルになる。葉は互生し長さ八～一八センチメートルの披針形で先端は細くとがり、縁には歯牙状の鋸歯腺点がある。夏、葉腋から長さ三～七センチメートルの花柄をのばし、白または淡紅色の花を多数下向きに開く。果実は直径六～八ミリメートルの球形で紅熟する。こうじ。たちばな。
- 3 「やぶこうじ（藪柑子）」の異名。

ゆ ず【柚・柚子】

ゆず¹ ミカン科の常緑小高木。中国の揚子江上流原産とされ、各地で栽培される。高さ約四メートル。枝に長いとげがある。葉は翼のある柄をもち長卵形で縁に鋸歯がある。初夏、葉腋に純白色の小さな五弁花を一個ずつ開く。果実は扁球形で径四～八センチメートル、芳香があり黄色に熟す。果皮にはいぼ状の突起が多く、果肉は淡黄色で酸味が強い。果皮は香香料、マーマレードの原料に使われる。漢名に柚を用いるが、これは別種の名で、中国では蟹橙・香橙を当てる。ゆずのき。ゆう。ゆ。《季・秋》

2 醜女（しこめ）のこと。²

だい だい【橙・臭橙】

だいたい¹ ミカン科の常緑小高木。インド・ヒマラヤ原産で、日本へは、古く中国から渡来し、各地に植栽されている。枝・葉は密生し枝にはとげを散布。葉は厚く透明な油点がある。葉身は長さ六～八センチメートルの卵状長楕円形、先はとがり縁は波状か鈍い鋸歯状。葉柄には広い翼がある。初夏、葉腋に芳香のある白い五弁花が咲く。果実は球状で冬に黄色に熟し、翌年の夏になるとまた緑色にもどる。このことから「代々」の意かといわれ、また、「橙」の中国音の変化とする説もある。果実は酸味が強く苦味があり、マーマレードの材料とされる。果実が年を越しても木についているところから、「代々永続」などの意に解し、正月の飾りに用いる。果皮を漢方では陳皮（ちんぴ）といい発汗薬や健胃薬に使う。漢名、橙。《季・新年 秋》

2 「だいたいいろ（橙色）」の略。

--の数（かず）（毎年毎年、正月に橙を飾るところから）年の数。年齢。年。

いそかいめん【橙磯海綿】 イソカイメン科の海綿動物。各地の海岸の潮間帯の岩に付着して生活する。体は橙色をし、表面に円錐状の突起があり、その先端に口が開いている。体表には無数の小孔があり、海水がここから体内に入る。

いろ【橙色】 熟した橙の実のように赤みがかった黄色。オレンジ色。

ず【橙酢】 橙の果実からしぼり取った液。酢の代用とする。

こう じ【柑子】

こうじ

（「かんじ」の変化）

1 ミカン科の常緑小高木。在来ミカン的一种で耐寒性が強く、山陰・北陸・奥羽地方にも家庭用として栽培されている。果実は扁平で小さい。果皮は蠟質黄色、滑らかで薄くむきやすい。果肉は淡黄色で、八～一〇室あり、酸味が強く種子が多い。スルガユコウ、フクレミカンなどの品種がある。こうじみかん。また一般にミカンの異名としてもいう。《季・新年 秋》

2 「こうじいろ（柑子色）」の略。

3 襲（かさね）の色目の名。表、裏ともに朽葉色（くちばいろ）のもの。

4 「からたちばな（唐橘）」の異名。

狂言。各流。預かっていた柑子をたべてしまった太郎冠者は主にいろいろ言い訳をするが、ついに六波羅（腹）におさめたと白状する。

コウジ *C. Leiocarpa* hort. Ex T. Tanaka ミカン科

日本固有の柑橘でタチバナの近縁種。耐寒性、病虫害抵抗性が非常に強く、かつては自家用として東北地方南部まで栽培されることがあった。果肉は黄色で酸味が強い

キシウミカン *C. kinokuni hort.* Ex T. Tanaka ミカン科

中国長江上流原産のタチバナの近縁種。樹性強健で日本の気候風土に適しているため、かつては我が国の代表的柑橘であったが、無種子であるウンシュウミカンの普及により殆どみられなくなった。若木時代の生育は緩慢であるが、高齢樹になっても樹勢が衰えず大木となる。果肉は橙色で酸味適度で品質はよい。

なつ みかん【夏蜜柑】

なつみかんミカン科の常緑低木。江戸中期に、現在の山口県長門市大字仙崎字大日比で発見され、その後各地で広く栽培、その産量はウンシュウミカンに次ぐ。高さ約三メートル。葉は楕円形で柄には翼がある。初夏、白い五弁花を開く。果実は径一〇～一五センチメートルの扁球形。果皮は黄色でわずかに橙色を帯び、厚く凹凸が多い。果肉は濃黄色、多汁で酸味と苦味が強い。生食のほか、ジュースや冷食とし、果皮はマーマレードや砂糖漬にする。なつだいたい。なつかん。《季・春》

橘と秀真文字によるタチバナの違い

橘という字は、漢語で読むと「キツ」だが、日本語でいえば「たちばな」。

現代の日本人はこの二重読みにすっかり馴れてしまっている。

その上、漢字のもっている意味が、日本語の意味と同じであると思い込む向きさえある。

果たしてそれでいいのだろうか。「キツ」と「たちばな」とは同じ意味をもつものだろうか。と松本善之助氏は自著『続 ホツマツタエ』の中で疑問を抱いていた。

「橘」には二通りの種類がある。ニホンタチバナは日本生来のもの、カラタチバナは中国渡来のもので遣唐使たちは、ニホンタチバナに「橘」の字を当て、カラタチバナに「枳」の字をあてた。カラタチバナは後に省略されて単にカラタチとなる。

しかし、「橘」は本当にニホンタチバナとしていいのだろうか。

字の構成をみると、右側は、矛＋内（中に入る）＋口（あな）からなるもので、刃物で内をえぐって穴をあける事を意味する。今日のミカンは皮をはいで中味を食べるが、昔は刃物で皮に穴をあけ、中をえぐって汁をしぼり出したのだろう。

この植物を日本純粋古語で表すと、「秀真文字のたちばな」と書かれるべきである。

なぜなら、古代日本民族はこの植物の名を「秀真文字のたちばな」と書いていたからである。この語構成を考えると「秀真文字でタ＋チ＋バナ」の三語からなっている。

秀真文字のタとはイタイ（痛）とかイタヅラ（徒）とかいう場合のイタで、秀真文字のタチバナのタはこの秀真文字のイタのイが略されているとみることができる。

元来、秀真文字のイタとは、普通の状態を越えた形容で、ハナハダシイ（甚）という意味なのだった。だからイタイ（痛）は異常な苦しさを現わす形容となる。また、イタヅラ（徒）では、ヅはもとツで、イタとラを結ぶ助詞であり、ラとはある状態の継続する

有様の接尾語である。だからこの語は、ハナハダシイ（甚）行為を持続するということになり、常識はずれの困った動作を意味することになる。現代仮名遣いでは、イタヅラをイタズラと書かせる。しかし、これではこの語の元々の意味がわからなくなってしまうのである。タカラ（宝）タキ（滝）タガヤス（耕）もイが略されている。

秀真文字のタの次のチですが、国語辞典で「チ」という言葉をひくと、「血」「乳」「父」

「霊」などの漢字が見つかりますが、漢字だけをみたのでは、これらはまったく異なった、別々のもののように考えられます。ところが「血」「乳」「父」「霊」は本質的なところでは繋がっていると考えられます。みな、生命を維持するために必要な生命源といえるものを意味しています。ですから、秀真文字の「チ」は、日本人が何よりも尊く重んじてきた徳目であります。要するに、秀真文字のタチバナとは、「イタ（甚）」なる「チ」、「チ」を最高に備えている「ハナ」ということになる。だから古代日本ではどの植物よりも崇高に扱われてきたのだった。

【六・十二】香久宮と大内宮

御子すべて 五男三女なり

南の殿に	橘植ゑて
香久の宮	東に桜植ゑ
大内宮	親ら政
聞こし召す	あまねく民も
豊かなり	月読尊の妻
伊予津姫	生む望高は
伊吹戸主命	

最初の新聞記事に、平安時代に植えられた橘云々と書いてありましたが、これが右近の橘、左近の桜の起源であるはずです。平安時代になってから、はじめて紫宸殿の南階下に橘が、東階下に桜が植えられたように思われていますが、実はそうではなく元は神代に遡るのである。

風に散る花橘を袖に受けて君が御跡（みあと）と思（しの）ひつるかも
万葉集 作者未詳

参考文献

- 「完訳秀真伝」上・下 鳥居礼 八幡書店
- 「校本三書比較 ホツマツタエ」 松本善之助 池田満
- 「続 ホツマツタエ」 松本善之助 毎日新聞社
- 「言霊-ホツマ」 鳥居礼 たま出版
- 「原色和漢薬図鑑」 難波恒雄
- 「日本薬局方第12改正」
- 「意訳神農本草経」 浜田善利、小曾戸丈夫 築地書館
- 「新註校定 國譯本草綱目 第八冊 菜部・果部」 春陽堂
- 「漢薬の臨床応用」 神戸中医学院
- 「くすりの辞典」
- 「大塚敬節全集」 大塚敬節 春陽堂
- 「風土記」 吉野 裕訳 東洋文庫
- 「古事記」上中下 全訳注 次田真幸 講談社学術
- 「処方理解のための漢方配合応用」 医学堂研究会
- 「日本薬草全書」 田中俊弘 水野瑞夫